
君、真夜中の橋を渡れ。（第1部）

15(jyugo)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君、真夜中の橋を渡れ。（第1部）

【コード】

N6996V

【作者名】

15(jyugo)

【あらすじ】

九州の田舎の創立45年の高校に、

「学校始まって以来の秀才と噂される、伊藤治」は入学した。

周りの期待とは裏腹に、治は思っていた、

「ちゃんと卒業できるかなー」・・・と

これは、青春の物語ではなく、大人たちへの「警告」の物語です。

子供を育てる親への「問いかけ」です。

期待

着古した制服を着て、校門をくぐり「きよるきよる」しながら歩いていると、

「おさむー」

と言う声に振り返ると、同じ中学校の一歳上の先輩が、友達と駆け寄って来た。

横に並んで歩きながら、先輩は

「本当に来たんだねー信じれないけど、私としては嬉しいな！」と

中学の頃よりははるかに「大人びた」顔と「方言で無い、大人言葉」で治に言った。

治はちらりと横を向いたがすぐに前を向いて黙って歩いていた。でも、内心は嬉しいさ半分照れくささ半分だった。

中学の頃の女子バレー部のキャプテンだった先輩。

治は男子バレー部の2年生、男子と女子が横で並んで練習していたから、

暇さえあれば、ちらちら見ていた先輩の運動服姿、

はち切れそうな、胸の膨らみ、
「ドキドキ・・・」

伸びやかな足、太もも、そして、、、」「ドキドキ」「ドキドキ」
練習の合間には、水場で汗を拭きながら、
「おさむー！練習中によそ見ばかりしちよたらダメぞー」って
笑いながら話しかけてくれる。

家が同じ方向だったこともあって、帰り道はよく一緒に帰った。
帰り道での話は色々、学校の話、家庭の話、好きな人の話、
それこそ2年間たわいもない事を話しながら。
約40分歩く。

雨の日などは一つの傘で歩く。
夏の雨の日の先輩の汗と雨とに濡れたあの「匂い」は中学生の治には
とても甘美で、魅惑的な匂いを感じられた。

治は先輩のことが小学校の頃から好きだった。

初めて会ったのは先輩の家、小学校5年生の頃。
同級生で同じ村の女の子の誕生パーティーに呼ばれて、
初めて遊びに行った同級生の家に「先輩はいた」

「私のおねーちゃんばい！！」って同級生は紹介してくれた、
一歳だけしか違わないのに、妙に「大人っぽく見えた、」
につこり笑って、階段を上がって行った。

狭い村だし、学校も一クラスしかない。

しかし治はその日まで、先輩の存在に全く気が付いてなかった、
いや、気が付いていたけど何も感じていなかったという方が正解。

治はあの日初めて「性」に目覚めたのだろう、もちろん治自身は

その事には気が付いてなかった。
治が気が付くのは中学校に入ってからの事になる、
偶然入ったバレー部（生徒数の関係で、クラブはバレー部と野球部
と柔道部しかなかった）

クラブ活動の時の先輩の姿を見てからになる、、
そんなこと思いながら、1年間でかなり大人になった「治」は黙っ
て歩いていった。

「入学式会場」と言う案内板の所で先輩が、
「入学生代表は、治がすつとね？」と言うから治は「知らん・・・」
とだけ短く答えて
体育館に入って行った、治は代表なんて話は聞いてなかったから、
本当に知らなかった。

村の小学校の「講堂」とは比べ物にならないほど立派な体育館に少
し緊張していると、

「新入生だろう？名前教えて？」真つ黒に日焼けした大人びた男子
生徒がにこにこしながら立っていた、

「伊藤治です」

その瞬間近くにいた男子生徒までもが、「えっ！」って感じで治を
見る。

「君が伊藤君か！ようこそ！わが校へ」

治は全く意味が分からずに、「変な挨拶するんだなー」と内心思
っていた。

座る席を聞いてパイプ椅子の所に行くと、同じ中学校の親友の「ヒ
ロちゃん」がすでに座っていた。

ヒロちゃんは滅茶苦茶緊張した顔で身じろぎもせず座っていた。

「ヒロちゃん！もうきちよったと？」

「うん、早うに来ちよったよ・・・」と治に話しかけられて初めて気が付いたのか

びっくりするような顔で答えた。

「15（治のあだ名）すごかねー」何が凄いのか？たぶん感じているのは治と同じであろう。

「15、うんが（お前が）新入生代表ばすつとか？」

「うんにゃーそがん事や聞いちやらんよ」

「そつばってん、うんがすつとじゃなかつか？」

「知らんばい・・・したも無かつたい」

・・・ヒロちゃんとそんな話をしていると、

突然天井のスピーカーから、「あと5分で入学式を始めます、新入生、ご父兄の方は体育館にお入りください」とのアナウンス。

「ヒロちゃん、かーちゃんか、とーちゃん、来ちよつとか？」

「うんにゃ、来ちやらんよ、15や？」「来ちやらんよ」

二人とも貧しい村の子供であるから、両親はもちろん誰も来ていない。

二人とも制服も入学が決まってから、母親がどこからか貰ってきた学生服を着ている

ヒロちゃんの方の学生服が少し綺麗に治は感じた。

今年の村の中学の卒業生は6人そのうち高校に進んだのは3人

「治とヒロちゃんと治の憧れの先輩の妹」だけ。

中学校全体で卒業生は19人いたが高校に進んだのは4人だけ、一人は福岡の学校に進んだ。

後は、遠洋漁業の船乗りか、大工の丁稚、岡山県や近畿地方に集団就職、だった。

治も同居している爺さんに「高校んごちやっ」と行っても何はすつとかー早よ仕事ばせんかー」と幾度となく言われた記憶がある

夜遅く勉強していると、電気代が勿体ないといつも叱られた。

進路（高校）

中学3年生の夏、治は悩んでいた

高校進学、どうしよう、

治は3人兄弟の一番上、中学3年の春までは「就職」と言う選択肢に疑問すら感じたことは無かった。

遠洋漁業が都会に集団就職で出ていくか、母親は「治が良かごてせんね」としか言わない。父親は全く言わない。

高校進学など全く考えてなかった。3年生になり、新しい先生が転勤して来て、その先生が3年生の担任になった。

その先生が「多種多様」な「都会の風」を運んで来てくれた。

初めて、「校外模試」と言うものも経験した。

真っ白な紙のテスト用紙が治たち生徒には驚きと言うよりも感動だった、普通は茶色い、消しゴムですぐに破れるテスト用紙しか知らなかったから、

3年生の4月にその先生が「県下一斉校外模試」を受けさせてくれた。たぶん費用もかかったのだろうが、そのお金がどこから出たの

か治は知らない。

受けたのは治とヒロちゃんとあと2名の4人だけ。

後は誰も受けない、

小さい学校だから、みんなすごく仲がいいもちろん喧嘩はするが、いつも一緒に遊ぶ。でも、勉強などは全くしない。

治の村は普通だが、生徒の中には「隠れキリシタン」の村の子供たちもいたし、

「落ち武者（たぶんそうだと思う、）」の子供たちもいた。

差別だとかそんな事など分からない素朴な田舎の子供たち。

隠れキリシタンの村に遊びに行くとどこの村にも古いけど立派な教会があり、

子供たちも真面目に「ミサ」には顔を出す。

学校の先生の言う事は全く聞かないやんちゃんな子供でも、神父様の言う事は直立不動で聞く。もちろん親もそうである。

中学生になると、祈りの言葉を皆覚える、全く勉強しない奴らが登下校の時間も惜しんで小さい本を読みながら歩いている。

そして覚えたかどうかのテストがあるのだが、それにめでたく合格すると「聖母アリア様」の小さな「ロザリオ」

を神父様から頂ける。

だから、中学3年生にもなると男も女も首からシルバーのチェーンでロザリオをぶら下げている、それは取りも直さず「信仰心の表れ」であることはみんな知っていた。

その村のお墓などは一風変わっていて、普通の墓石の上に十字架が付いている。

仏壇？も和洋折衷みたいな感じ、

高校に入ってから、「キリスト教の弾圧」を学んだ時に妙に生々しく友達や村を思い浮かべた。

同じく高校に入ってから「源氏と平家」を学び「壇ノ浦を知り」落ち武者を学んだ時も「源氏に負けた平家が落ち武者となり逃げて来て、隠れ住んだ。」

それが友達のルーツだと思うと「友人」の歴史を深く考えた、もちろん中学時代はそんなこと何も考えなかったのに、

治の中で知識と現実が混同し出した頃でもある。

学問が妙に生々しく感じて「身近」なものとして治の体の奥深くに入り込んで来る。

中学生までは全く感じなかった、学問の側面を感じだす頃でもあった。

初めて受けた県下一斉でその「問題」は露見した、

ある朝のホームルームの時である。

「都会」の担任の先生がいつものように教室に入ってくる。級長の「きりーつ」「れい」で一日がスタートする。

いつものように先生の話が始まる。

「今日は皆に嬉しい報告があるよ！！実は先日4人が受けた県下一斉模擬テストの結果が出た。

その結果、治がなんと！県で16番だった！！」

先生は嬉しそうに、それも大層に、皆を見渡して言った。だが、生徒の殆どは何を言っているのかさえ分からない、といった反応。

当の本人の治はと言うと、
「へ〜〜1番じゃなかったんだ、」と言う軽い驚きぐらいであった。

模擬テストを受けた3人は、各々が治の顔を見ている程度。

治の横の席のヒロちゃんが、「治すごかねー」と口を開いた。それに答えるように先生が、「県で16番は凄い！治この調子で頑張れ！」と治に向かって言葉をかける。

ある生徒から、「治は天才じゃけん、あたりまえばい」と声が出る。

それがきっかけで、生徒たちが、かつて気ままな事を話し出す、

「治より頭ん良か人っちゃおっとな？」と言う女子。

「治かっこんよかねー」と言う隠れ治ファン、

殆どの生徒がそれぞれの言葉に多分納得してる様子であった、

治はこの中学校の生徒の間の「誇り」でもあった。

後輩などは昼休みに勉強教えにもらいに来る。

勿論放課後などは4〜5人が教室にやってくる。

バレー部のほうは弱小中学だった為に、

一回戦であえなく敗退、2セットストレート負け、、、9人制
だったが、

サーブを最後の一人が打てないぐらいの圧倒的点数差で敗退。

クラブが終わってからは、毎日放課後になると後輩の「治参り」
が日課となる。。

でも、殆どが「女子生徒」だった。

「都会」の先生の驚きはその後も続く、次回の模擬テスト「15
番」その次「20番」その次「14番」・・・

しかし、その先生の驚きの原因は順番ではなかった、テスト内
容である。

すべての模試での数学の点数である。全て「100点」・・・

そのテストは各学校で行うのだが、
本当の驚きは、全てのテストで治が数学のテストを解くのに掛かっ
た所用時間であった。

50分の制限時間のテストを治は毎回15分ぐらいで事も無げに終
わらせる。消しゴムすら使わない。

それでいて満点。

先生の驚きはその点だった。

勿論、社会と理科も全て「100点」国語は漢字が全く駄目で、
「90点前後」、
英語は苦手らしく「80点」取れるか取れないか、
、と言う感じで
他の4教科は制限時間をしっかり使って解いている。
数学だけが15分で解きその後はボーっとしている。

「治、数学好きか？」と先生が聞くと治は「はい!!」と嬉しそう
に答える。

その先生が進学を治に薦め、親も先生が説得してくれたお陰で。
治は高校進学を決意する事になる。

一人で考えていたら出てくることの無い結果であった。

その日から治の高校に向けての「高校調べ」が始まった、
受験勉強など全く気にもしていない。

何故なら、就職と心に決めていた治だが、毎日勉強はしっかりやっ
ていたからだ。

だから、特別にやることも無かった。

心配なのは、「高校って何？」と言う疑問と「どこの高校に行けば
いいの？」と言う選択だった。

治は毎日高校の事が気になりだした。

しかし、周りに高校行っている人がいない、同じ村にもたまたま高校生はいなかった、いたにはいたが、治が中学3年生に上がるのと入れ違いに卒業してしまっていた。

もちろん父親も母親も中学卒だし、親戚にもいない、誰にも聞けない、聞けるのは学校の先生だけ、

だから毎日のように先生に聞きに行く、でもその先生の話では治自身が全く納得できない、

仕方無いので学校の図書館で色々と読んで見る、

その結果、少しずつではあるが分かってきた。

日本で一番いい高校は「N校」九州で一番いい高校は「鹿児島R校」治はR校に行きたいと思いだしていた、

自分の中での目標が決まった。それからは高校調べは全くしなくなった。

しかし、かと言って、特別に勉強するわけではない、いつもの通りの生活だった。

当然の事、高校に「私立」と「公立」があることも気が付かない、気が付くのは夏を迎えてからの事になる。

治の育った島は九州の西の果て、古くは「遣唐使」がここを中継して「唐」に出かけたり、江戸時代末期は、かの坂本竜馬の「亀山社中」の船が島の沖合で難破したりしている。

余談だが、竜馬が船の沈んだところを見るためにその当時、来島している。

治はそんな島の端の方で生まれて育った。

東シナ海と日本海と、少し離れてはいるが、太平洋に囲まれた、「海の中に島が突き出ている」そんな感じのところ。

家の目の前は海、後ろは山。

村の人口は何人ぐらいなのか知らない、たぶん、2000人ぐらい？もつと？？それすら気にしない子供時代。

お店は一軒だけある。食料品を売っている。

洋服屋さん本屋さん電気屋さん車で舗装もされていない山道を1時間ほど走った「町」にはあったが、

その町は治たち子供には全く関係のない所であった。

きれいな海と山、大自然の中で治は育った。

父親は漁師、母親は毎日畑仕事に出かけて行く、母親は自分の畑仕事だけをするのではなくて、

他人の畑にも出かけて行って毎日遅くまで、野良仕事をする。

これは決して珍しい光景ではなく、極々当たり前の事当然治の家の小さな畑にも

近所のおばちゃんらが大勢やって来て野良仕事をして、

次の日は別の畑、みたいに「効率よく」仕事をして行く。

畑にまく、肥料の殆どは「人糞」だった。

下水の普及は0%。

だから、当然「溜まる」それを柄の長い柄杓ですくって、大きな桶二つに入れて、
天秤棒で担ぎ山肌に張り付いている段々畑の山道を器用に登って行き畑まで持って行きまくるのである。

それは、子供たちにとっては「奇異」な光景にしか思えなかった、その奇異な仕事をしている一人の「おじさん」がいた。

人からは「重吾じゅうご」と呼ばれていた。

重吾は頭が弱いらく、あまり言葉を話せない、村中の家を回って、「肥え汲み」をして生計を立てていた。住まいは何処か子供の治たちにはわからなかった、たぶん山奥だったと思う。
学校帰りなど、重吾が天秤棒を担ぎ向こうの方からやってくると、子供たちは、それこそ、怪獣かお化けでも探し当てたみたいに。

「重吾が来たあーーーーー」と叫び散らし皆で大騒ぎする、
どンドン重吾との距離が近くなると、皆一様に緊張する。
無言になってすれ違いの時を迎える、
すれ違ったその瞬間、

「わあーーーー重吾だあーーーーー」と一斉に走り出す。

安全圏まで走ると皆振り返って「敵」を確認する
すると重吾は何事も無かったかの如く、器用に天秤棒で担いで「ヒョコ、ヒョコ、ヒョコ、ヒョコ」と歩いている。

ある日の学校帰りに「敵」と遭遇した、

「重吾発見！」

見ると「敵」はいつものように天秤棒に二つの桶を吊るして歩いていた。

「はっけん！！はっけん！！じゅうごはっけん！！」と誰かが叫ぶ。この言葉に子供たちは異常に盛り上がる。

中学3年生になった子供たちである。都会の中学生と比べたらなんて幼いのだろうか。

純粹と言う事なのかもしれないが。

この「敵」は絶対に反撃してこない、何故なら桶に「中身」が入っている時は反撃できないからだ。

反撃行動を取ると、「中身」を溢してしまうから、溢したら大変！！臭くて。。それこそ大事件！！だから、大声で威嚇すらできない。

でも！！桶に中身が入っていない時は危険である、その時は子供たちはそれこそ、「敵」の姿を見た瞬間に全速力で今来た道を逃げて行く。

身軽な「敵」には勝てないことを子供たちは知っている。

勝てる敵か勝ち目のない敵かは、遠目でもすぐにわかる。

勝ち目のない時は天秤棒の片方に空の桶を二つ吊るして片方の肩に担いで歩いているからだ。

今日は天秤棒を両肩で担いでいる、、、、

いわゆる。。。。「安全日」、、、？（中学の頃の治には勿論、無縁の言葉であるが）

いつもの如く、「肅々」と敵との距離は縮まって行く、子供たちの緊張は最高潮！！

遭遇距離10メートル

遭遇距離5メートル

遭遇距離3メートル

・・・

遭遇距離・・・

・・・１メートル・・・とその時事件は起きた！

「安全日？」なはずの敵が「うがぁーごふえー」みたいな奇声を発して

子供たちに向かって天秤棒を振りかざしてきた。

皆一瞬啞然！！！！次の瞬間、
「わぁろがぁー—————
ー」

とこれまた奇声を発してそれこそ蜘蛛の子を散らすごとく飛び跳ねて逃げて行く。

重吾は名前の通り？鈍重な動きであったから子供たちは難なく敵の攻撃を全員無事に

、、、回避、、、

出来た・・・かに思えたが、不幸なことに・・・「流れ弾に」当たった仲間がいた。。。

「治」である、

余談だが治は中学校一の「俊足」の持ち主でもあった。

その治に流れ弾が当たった。

重吾の天秤棒の先には空の桶が吊り下げてあったのだ！
敵はその日「偽装」していたのである。

治もみんなと同じ反応速度で反応して走り出した。

第一波「主力艦隊」の攻撃は全員無事回避した、

しかし、しかし、である。

桶に付着した、「汚物」の一粒のしずくが、
まことに不運なことに、治の「白い」シャツの背中の中心に「
命中」したのである。

それは、本当に不幸な出来事であった。

背中には、「ウンチ」の塊が。。べつとりと、当然臭いも。。

一斉撤退の後の集合場所で全員で治の「負傷箇所」を代わる代わる
見る。

「うえっー」「ぐわしい・・・」「げえええー」・・・みんな言
葉にならない。。

まるで、伝染病の「保菌者」でも見るように心持、距離を置いて

いる。

……治……

「臭かぁー」と、誰かがポツリ。。。

その言葉を皮切りに、子供たちの本日の次なる「敵」が決まる。

「わー治が、重吾「菌」に、やられたばい!!!」

「移るけん、逃げんばぞー」・・・などと口々に騒ぎ、走りだす。

治は、、啞然。。。

しかし、、反射的に、、逃げた「敵」を追いかける。

治は学校一の俊足。追いかける敵には「機動力」では絶対に負けない。

まず、殿の足の一番遅い「敵機」を捕まえて抑え込み、暴れる敵に自分の背中をこすり付ける。

これで、、「重吾菌」感染者一人追加。

それから、「重吾菌」軍の戦力は「ジェット戦闘機（治）」と「歩兵（感染者二号）」になり。

次なる敵をさらに追いかける、、

重吾菌軍の作戦はこうだ、、

「まずジェット戦闘機で敵を撃墜、墜落している敵に歩兵が抑え込み感染させる」と言う。。
言うならば、「ハンター」と「狩猟犬」作戦である。

逃げる敵軍は旧式のプロペラ機、追うのは最新鋭のジェット戦闘機、

その性能差は圧倒的である。

みるみる、敵機を撃墜し、その後続く歩兵部隊が「こすり付け作戦」を敢行する！！

さしたる時間もかからずに、敵軍全滅、全員めでたく・・・「重吾菌感染者」となってしまった。

この事件を境に、治には新たな名前が付いた。。。

「15(jyugo)」である！！

「15」

でも、治自身も「15」と言うあだ名は嫌いではなかった、

「自分も変わり者だから、丁度良いや〜」って感じで受け入れていた。

勿論、その後の治自身のラッキーナンバーは「15」である！！

恩師（12冊の問題集）

中学生生活最後の夏休み、

毎年真つ黒になるまで泳いだり魚釣りに行ったりの生活だったが、その夏は違った、

治自身は「鹿児島R校」に向けて勉強していた。

英語は苦手だったので、殆どしない、やる教科は、もっぱら「社会」の暗記中心。

理科と数学は全く心配してなかった。

夏休みのある日、小学5年生の頃の担任の先生が治の、村に遊びにやってきた。

治は喜んでその先生と泳ぎに行ったり、魚釣りに行ったりした。

その先生が、

「治高校行くんだって？」と切り出した。

「うん、かーちゃんも、とーちゃんも、よかち言ったけん」

「どこに行きたいんだ？地元か？」

「鹿児島んR校ち言う学校に行こごちやつとばってん、」

「R校はとて面白い高校だけど、私立だぞ！」

「授業料も高いし、寮費も高いぞ！親は大丈夫か??」

治は学校のことをまったく知らなかった、どこの学校も中学と一緒だと思っていた、

確かに鹿児島は遠いが、地元の高校でも家からの通学は不可能だから、

寮か下宿しなければいけない、。 だったら鹿児島も一緒だと思っていた。

少なからずシヨックを受けて、

「先生、。、 授業料つてそがん高かと・・・??」と聞くと。

「うんそうだなー高い。。。」

治は黙り込んでしまった、。

「治将来何になりたいんだ？」

「船に乗って、外国に行きたか！」と目の前の海を見ながら言った。

「そうかーそれは良い！だったら、商船大学に行くんだぞ！」

「おつでも、行けつと??」

「難しい、でも治なら絶対に大丈夫だ！」

治は自分の未来が決まったみたいで、嬉しくなって来た。

先生が続ける、

「親が反対したら、R校の学費は奨学金受ければ良い」

「しょうがくきん？ち？何ね？」・・・??

「国が優秀な生徒にはお金出してくれるんだ」

と教えてもらった、

治はますます、嬉しくなって来た、。 自然と笑みがこぼれているのが分かるくらいであった。

高校に行く決めてから、こんなにもはっきりとした感じで話してもらったのは初めてだったし、

なんとなく「もやもや」していたものが晴れた感じであった。

治にとってこの先生は「生涯の恩師」である。
この先生のお蔭で今の治がいる。

それは小学校5年生の春の事だった。

その先生が担任になり、しばらく経つての算数の授業中の事。

治は当てられた、「治答えてみて」

成績は小学校4年生までは田舎の小学校の中で、真ん中ぐらい、まあ都会地なら、5段階評価の、オール2か3程度の学力だったと思う。

その時は緊張しながら治はチョークで黒板に答えを書いた。

まったく自信のない答であった、

でも、先生が

「治？これ誰に教えてもらったの？」と聞いてくる、

治は、間違えた、、、、と思い。

「ごめんなさい、、自分で考えたとはってん……」

それを聞いた先生は、この解き方は、昔習っていた解き方で今は教科書にも載っていない解き方なんだと言い

「治すごいぞー」と褒めてくれた。

その一言が

治の人生を変えた。

それからと言うもの治は算数の勉強が楽しくなった。

毎日家に帰って5時間ぐらい勉強する。

小学校5年生の子供が毎日5時間自宅で勉強するのである。

親には、電気代が勿体ないと怒られながらではあるが…

それは、ある意味異常な世界でもある。

来る日も来る日も算数の教科書を眺めては色々な解き方を考える。

当然学校の算数テストはその後全て満点。

ある日先生が「治今日私の家において」と誘ってくれた。

治は学校が終わってから先生と一緒に先生の家に行った。
家に行くとき、

子供の目にも「綺麗な」奥さんが、
「伊藤君ね、いらっしやい」と迎えてくれた、

治は少し恥ずかしかった、

それから、先生と裏山に散歩に行っている話して、帰ったら。
「伊藤君食べなさい」と・・・ご飯の準備がしてあった。

それは治にとっては正月とお盆にしか見たことないようなご馳走だった、

「でも、帰らんと、かーちゃんに怒らるっけん・・・」
と。

先生が、

「家には○○に言ってもらってるから心配しないでいいぞ」と言う、
それを聞いて治は嬉しかった、目の前のご馳走を食べたかったのである。

治は食べた。

とても美味しかった、

食べ終わって、

「これからも頑張るんだぞ」と言ってくれ

本を3冊くれた、見ると算数の問題集だった。

治は問題集と言うものを初めて見た。

綺麗な表紙を捲ると、たくさんの問題が整然と並んでいる、
食い入るように見ている治を見て、先生が

「これが終わったら次のあげるから、言いなさい」と言ってくれた。

その日から治はその問題集を毎日解きだした。

算数の教科書にはない問題が沢山有って治は楽しかった。

しかし、二週間ほどで全部終わってしまった、

学校の廊下で、「先生、終わったばい」と言う

先生はびっくりして「全部終わったのか？」と聞くから

「うん、終わった、」と答える

先生は笑いながら、

「わかった、もう一度あの問題集をやり直してごらん」と言う。

治は先生に言われたようにその日からもう一度問題集を解きだした。

今度は1週間で全て終わった。

「先生、終わったばい」

それから数日後、先生がまた一冊の問題集をくれた。

今度の問題集はとても分厚かった、
それに、問題もとても難しい、
治はなかなか解けない、解けないどころか、問題の意味さえ分
からない。

それでも毎晩5時間は問題集を見る。

そのうち治は問題集の解き方を自分で考えだす。

「答えを見て、次の問題も同じように解く」と言うやり方である。
解き方の意味は分からないけど、全く同じように当てはめると、
不思議なことに答えが出た。

来る日も来る日も同じことの繰り返し、
意味も何も分からないけど、まるで「パズル」でも解くように
「当てはめて解く」の繰り返し。

小学5年生の治には答えが同じになるのがとても楽しかった。
その問題集は3か月かかった、

「先生終わったばい」と言う。

先生はびっくりした顔をして、「本当に終わったのか？」と聞く。

「うん」

「後で職員室において」と言われた。

授業が終わって職員室に行くと、担任の先生と違う先生が後二人い
た。

担任じゃない先生が、何か問題が書いてあるノートを差し出して、「治、この問題は解いてみんね」と言う

ノートに書かれてあった問題は分厚い問題集で見たことある問題に似ていた。

当てはめる『パズル』を思い出して、治は解いた。

治にしてみれば、パズル通り解いたのだから、何にも思わなかったが、

先生3人は、びつくりした顔で、

一人の先生が、「どうやって解いたんだ？」と聞くから。

「先生にもろた、問題集に書いてあったごて、解いたっさ」と答えた。

もう一人の先生が「これは中学3年生の問題だぞ」と言うから、治は少しびつくりした。

数年後この時の話を担任の先生と話す事があって、先生に言われた。

「あの時の問題集は先生が持っていた。最初のやつが小学6年生と中学1・2年用だったんだ、」

「それで、次も問題集は先生が本屋さんで買ってきた、問題集で高校受験用のハイレベルの問題集だったんだよ」

「正直あの問題集は出来ないと思っていた、先生も安月給で治に問題集買ってやるのはきついからなあ」と笑って話してくれた。

その後5年生が終わるまでに、その先生には3度問題集をもらった、
そして、6年生に上がる時に、
その先生が5冊の問題集をくれた、
その問題集は赤色で分厚くて・・・「チャート・・・」と書いてあった。
それぞれに「数?・数?・数?・基礎解析・代数幾何・・・」と書いてあった。

治は一年かけてその問題集を全て終わらせた、

小学校を卒業する頃には、先生にもらった12冊の問題集のすべての意味が分かるようになっていた。

中学に上がる春休みに、今は担任ではないけど、先生に小学校の職員室に呼ばれた、

「おー治!いよいよ中学生だなーおめでとう!」

治は嬉しかった、
「うん、先生からもろた問題集面白かったばい」
先生も優しく笑ってくれた。

「治、この問題解いてごらん」と言われて、
プリント5枚ほどの問題を手渡された、
問題が書いてある。

先生が鉛筆くれて、「ここで解きなさい」と自分の横の机を指差す。治はその机に座って問題を解きだした。

。。。難しい、、、だが何とか解ける。

先生はその間横の机で「ガリ版」で何か書いている。

治と先生以外誰もいない春休みの職員室に、

先生の書く「ガリ版」の「カリカリ」と言う乾いた音だけがしていた。

結局2時間ほどかけて全問解いた。

「先生、出来たばい、難しかったけん、時間の掛かったばってん、、、」

先生が、背伸びをして「おおーもう出来たのか」と言ってプリントを手元に寄せて。

自分の机の引き出しから何やら違うプリント出して、見比べている、

その間治は、トイレに行った。

職員室に戻ると先生が。

「治、全部あつてたよ」と言ってくれた。

それから、「先生には分からないけど、答えはあってるから良いと思う、」とも言ってくれた。

この問題の正体は、

前年度の「京都大学医学部の入試問題」であった。。。

制限時間2時間半の問題を、小学卒業間もない少年が2時間足らずで全問正解したのだ。

これは驚異的な事であるが、治はその事には気がついていなかった。数年後、「あの時は先生は全部の問題が分からなかったんだよ！」と聞かされた。

小学校5年6年の二年間、毎日、毎日5時間かけて「遊んだ」問題集だった。

治は中学3年間も結局この問題集だけを毎日5時間は解き続けた。狂ったように毎日毎日、それが治にはとても楽しかったのだろう。中学卒業の頃は、ボロボロになり、セロハンテープで補修だらけになってしまっていたが。

12冊の問題集は、治の『宝物』になった、

失望

夏休みが終わり、秋になり治の通う田舎の学校でも進路相談なるものがあつた。

「とーちゃん、来週中学校で進路相談ち、言つとんあつとけど、来てくるっね？」

「とーちゃんが、行つたつちや分からんばい、先生と治が良かごて決めんね」

「……うん……」

治は不安であつた、まだ中学生、それも初めての高校受験、いや、初めての人生の分かれ道の選択、

暗闇の向こうに何があるのかさえ分からない、

それを、「自分の問題だ」と正論で諭された不安。

治にしても自分の父親の事を良く分かっている。

高校の事や勉強の事は全く分からない筈、しかし、

一緒に来てほしかった。

母親はと言つと、もつと酷く、

「ダメダメ、かーちゃんじゃ、先生に笑わるってん、治ん方が

分かつじやる？」

「かーちゃん、邪魔になっただけじゃけん・・・」と取りつく島すら無い、

「親は無くとも子は育つ」

そんなのは嘘だと思った。

治はその日から、親に相談をしなくなった。
何事も一人で決める子供になった。

面談当日。

「治高校はどこを受けるんだ？」

「鹿児島R校ば受けたかとばってん。」

「ん????とうちゃん、かあちゃんは知ってるのか？」

「任せると言われた」

「そうかー、私立だけど学費とかは？」

「しょーがきん・・・ち言うのは受けたかとばってん、先生どがんな？」

「うん！治の成績ならたぶん大丈夫だろう！」

「調べていてあげるよ」

「はい！」

治はまさに天にも昇る気持ちで返事をした。

数日後の夜。

治はいつものように古い家の2階の屋根裏にベニヤ板貼り付けただけ、

「自分の部屋」のこれまた古い丸い食卓で勉強していると。

下でいつものように焼酎を飲んでいる父親が、

「治!!ちよこ、降りてこんかぁー!!」と機嫌悪そうな声で怒鳴っている。

子供の頃から怖い父親であったので、さほど気にせず1階に下がって行った。

そこには酔っぱらったいつもの父親が座って、その横に、中学校の治の担任である「都会の先生」が驚いた眼をして座っている。

治は内心、、「とーちゃん、かつこわるかぁー」と思いながら。

治は立つたまま、「なんね?」

「先生に聞いたとばってん、うんや鹿児島に行きたかとてや?」

「うん・・・」

「どがんして、そがん大切な事ば言わんとやー!!!!」とすごい剣幕。。

治は慣れてるが、都会の先生は正座してガチガチに固まっている。

治は「言うたつちゃ、分からんじゃろ」・・・内心は（聞いてくれんやったやるが・・・）であつたが、

すると、父親が手元にある焼酎の入ったコップを治に投げつけて、

「こん馬鹿が！お金やどがんすつとか！！」

コップは治には当たらなかつたが、焼酎がかかった、治の嫌いな焼酎の臭いがした。

「国から出してもらつけん、よかと」

「うんや、なんば言いよつとかー！お金借りてまで高校ごちゃつとこ行かんてよかつちやー」

「馬鹿が！！もう高校ごちゃつとや行くなあー船に乗れー」

「銭んば借りてまでして、行ったち言うたら、村中ん者んか、笑わるつとぞー！馬鹿が！！」・・・と凄じい怒り様である。

「都会の先生」は横で、固まっているだけ。

治は先生に助けてもらいたかつたが、

先生は「治良くお父さんお母さんと相談して決めなさいよ」とだけ言うつと、

逃げるように帰って行つた。

治は「恥ずかしさと」「見捨てられた悲しさと」「で、何も言わずに自分の部屋に上がって行った。その日はそれ以上の話は無かった。

しかし、治は色々と考えていた。

「全く見えない、想像すらできない未来と言う暗闇の向こうを・・・

」

迷走

治は自分の希望する高校への進学をあきらめた、
それと同時に高校進学自体を止めにすることに自分では決めた。

ある日の夜に父親に

「とうちゃん、高校行かんばい・・・仕事すっけん」と伝えると父親は。

頭ごなしに「ばかかぁー高校に行けー!!」と怒鳴り出す。
こうなったら、その場を逃げるしかない。

逃げた・・・

何の話し合いも無いままに、何の進展も無いままに、ただただ
時間が過ぎて行く。

結局、治は地元の高校に入学することになった。

治自身、父親の考えが分からないままの高校進学であった。

しかし、地元の高校では治の入学はちょっとした「ニュース」と
なっていた。

そのころから治はよく「東大」と言う言葉を耳にするようになる。
それと同時に治自身は心にあることを誓う、

「絶対に東大には行かない！」

と言う事である、理由は簡単、周りの大人たちへの反発であった。

ヒロちゃんは治の進路を聞いて大喜び、であった。

「15一緒に寮に入ればいい」とか「わからんやつたら教えてくれんばぞー」とか、
とにかく仲間が出来て安心したのかもしれない。

治にしても、ヒロちゃんと「バレー部の先輩」が地元の高校にいる、その2点だけが救いであった。

入学試験の日、治の村からだ受験時間に間に合わないから、前日から

「都会の先生」が引率して高校の近くの「旅館」を取ってくれて泊まり込みで受験に向かう

2泊3日の日程である。

男子2名女子1名それに先生の4名。

女子は治の憧れの先輩の妹。この妹は、とにかく「凄い！」何が凄いのかと言うと、

「全てが凄い」のである。

身長こそ170センチぐらいしかないが、体重はたぶん治とヒロちゃん二人分は楽にありそうで、

それでいて、バレー部のキャプテン、エース、生徒会の会長、学級委員長、運動会では中心人物、頭の良さも、小学校4年までは「学校一」であった。勿論卒業式では中心人物。

とまあーとにかく凄い女であった、ヒロちゃんなどは「あつや、

こわかあー」と近づきたくもない様子。

治は、別段何も思っていなかった、ただ一つ姉との天と地ほどの違いを除いては。

姉は天使、妹は「岩石岩子??」・・・そう感じていた。

そんな子だから。旅館は当然？4人同じ部屋となった、誰も不思議にも思わない。

当の女子生徒本人も何も言わない。

受験前日夜旅館の一室で、先生がテストのときの注意点を皆に教えてくれた。

特にヒロちゃんは先生に「ヒロ落ち着けよ」と何度も言われていた、そう言われる度に。

神妙な面持ちで「はい、わかりました」と言うヒロちゃんを見て治は笑っていた。

夜はあいにく先生が同じ部屋なので騒げなかったけど、治たちにしてみればとても楽しい時間であった。

まるで修学旅行である。

寝る時は、まず治、ヒロちゃん、先生、、そして、、「岩子（本名ではない）」の順番で寝た。

受験当日はとても寒い朝だった、旅館から歩いて高校に行く受付などは全て「都会の先生」が済ましてくれた。

試験会場となっている「2年4組」の教室に3人は入室した。

窓際の席に前から、治、ヒロちゃん、「岩子」の順番で座った、

1時間目国語2時間目数学3時間目社会、それでその日は終わり。

二日目

残りの英語と理科を受験して、治の高校受験は終了した。

とても寒い日で初日などはこの地方には珍しく雪が降っていた。
治はテスト中にならずーっと窓の外の雪を見ていた。

結果。

「合格」

高校

緊張したヒロちゃんと並んで入学式が始まった。

色々な人の話が有って、入学生代表は別の中学校から来た女子生徒がやった。

校長先生の話の中で、

「今年の新入生は学業もスポーツも優秀な生徒が多いので楽しみです」

そう言ったのが治にはとても印象的であった。

実際にこの年の入学生たちは優秀であった、
スポーツではインターハイで個人優勝する生徒がいたり、
設計のテストでは全国で高校生の合格者が3名と言う難関を一人の生徒が合格したり、と
とても、見事なものであった。

大勢の新入生の中で、自分が特別な存在でないことが治にとって安心出来た。

山道

高校生活が始まった、

治の村からだ、高校までの道のりは、

村からバス停まで徒歩で30分、それからバスで約1時間20分かかる、

しかし、肝心のバスは「学生対応」の運行になっていない・・・朝一番のバスに乗ったとしても、学校に遅刻してしまうのだ。

治もヒロちゃんも入寮の準備も下宿の準備もしていない・・・

二人とも、そんなことなど全く気にしていなかったのだから仕方ないのではあるが。

高校通学初日、二人は仕方なく歩くことにした、山を三つほど越えた幹線道路まで出るのである。

そこまで行けばある程度の本数のバスが有る、それでも一時間に3本ほどであるが。

二人とも、弁当二つ持って歩き慣れた山道を歩きだす、時刻は朝の5時半。

朝の風が気持ち良い、この山道は山の中腹に一直線に続いている、山肌に沿ってクネクネ曲がりながらではあるが、上り下りがあまり無いので、楽ではあった。

眼下にはコバルトブルーの海が見える、小高い山道からよく目を凝らしてみると、

海の中の魚の姿が太陽の光に時には反射して、「キラキラ」光る。水平線の方を見ると、青い空と青い海がどこまでも続いている、

遠くの方に大きな船がゆつくりと通っているのが見える。

余談ではあるが、その当時、噂になった「50万トン級の世界最大のタンカー」が試験航行で沖合を通った時も治たち中学生は珍しくてこの山道までやって来て、その巨大な船を眺めていた。遙か遠くを航行しているのにもかかわらず、その船は巨大に見えた。その治たちの「沖合」にはいろいろな船が通って行く。アメリカの巨大な航空母艦なども有った。空母の巨大さに治たち少年は圧倒された、潜水艦も通る。とのうわさを聞いて見に来たが、姿は見れなかった。

昭和天皇が島を訪れたこともあった。

少年たちはいつものようにこの山道から見に行こうとしたら、大人たちに「日の丸の小旗」を手渡されて、

「船が見えたらこれを振るんだよ」と言われた。

山道の海がよく見えるいつものポイントに来ると、白い綺麗な船が沖合を優雅にすすんでいた。

すると遙か遠くの空から「爆音」が聞こえてきて、空のあなたの一つの点がみるみる大きくなってこちらに向かって来た。

「ジェット戦闘機」が二機ものすごいスピードで少年たちの頭上を飛び過ぎて行った。

空の遙か彼方からやってきた戦闘機は、「本土」の方からやってきた、

本土へは船で3時間半は掛かるのに、その戦闘機は多分1分と掛かって無いだろう、

治たち少年は白い大きな船よりも戦闘機の方が驚きであったのは言うまでもない。

そんな歩き慣れた山道を二人は並んで歩く。

二人とも当然、カバンを持っている。

治はノートと鉛筆と弁当二つだけ、教科書は入学式からほとんど目を通していたから、持っただけでよかった、それが後々大問題となることを治はそのころ知らなかった。

ヒロちゃんは、治とは違って学校でもらった、教科書は当然で、緑色の分厚い英語辞書までカバンに入れている。

勿論、弁当二つは入らないから、風呂敷で包んでもう片方の手に持っている。

二人とも歩く途中でカバンを手に持っているのが邪魔臭くなってしまう。

山道の途中には、野良仕事用の小屋が点在しているその一つに治は無言で入って行き。

適当な長さの「縄」を見つけて出てきた、

二人して、その縄でカバンをくくり付け背中に背負ってまた歩き出す。

ヒロちゃんは相変わらず手には風呂敷包みを持っていた。

治の村から目指す幹線道路まで約2時間はかかるだろう。

山道の途中には、村の火葬場があった、少年たちの「怪奇話」に良く登場する場所でもあったが、

朝の火葬場は治の目にはとてもきれいに映った。

1時間ほど歩いて、ヒロちゃんが、

「15〃腹んへったねー」と言い道路の真ん中に座り込んでしまった。

治も、「弁当ば、食ぶっか！」と言い横に座る。

乾燥した山道に二人はズボンが汚れることなどお構いなしに座り込

んで。

1つ目の弁当を開ける。

おかずは、二人とも似たようなもの。

「目玉焼き」「魚の塩焼き」「煮つけ」「梅干し・・・

それでも二人は「目玉焼き」が嬉しかったと思う大切そうに目玉焼きを頬張る二人であった。

道の真ん中で弁当食べながらヒロちゃんが、

「15、明日も歩くとか？」と不安そうに聞く。

帰りはバスで帰れるが、朝は如何ともしがたい。

治が「歩かんば行かれんじやろう」と答えると。

ヒロちゃんは「下宿ば探さんか？」と言うから、治が「うん、探そか・」と答える。

それ以上は今この二人の少年には具体的な話は全くできない。

約二時間かけて幹線道路に出た。

バス停に行くと高校生が5人程待っていた、隣の中学出身者である。二人の姿を見ると、不思議そうな顔をしていた。

皆、無言でバスを待ち、しばらくしてやって来たバスに乗り込んだ。

バスの中は高校生でいっぱいであった。

治はバスの混み様に多少びっくりして、ヒロちゃんに、「すごかねー」と言うと、

ヒロちゃんは無言であった。

バスの中の高校生の綺麗な学生服が、二人にはとても印象的だったのかも知れない。

バスで約40分高校の前に到着。

高校の前は綺麗な広い道路になっていて、何台ものバスが停まっていた、

そのバスから、学生服とセーラー服を着た高校生が大勢降りて来ていた。

治とヒロちゃんは、ただただ、啞然としていた。

まるで、大都会に来たみたいなの錯覚に二人とも捉われていたのだった。

高校に入り二人は教室に入る、ここで問題発生。

廊下に張り出されてる「新入生クラス編成」の張り紙を横で見ているヒロちゃんが、

「15、違うクラスばい・・・」と悲壮な顔をして治に言う。

治は多分ヒロちゃんより先に気が付いていたと思うけど、黙っていた。

「ヒロちゃん、大丈夫じゃけん」とだけ言うとヒロちゃんは黙ってしまった。

二人してお互い横の教室に入ってしまった。

治は1組ヒロちゃんは2組であった。

教室に入ると、もうすでに半分ぐらいの生徒は来ていて、教室のそこかしこでグループを作って話している。

治がキョロキョロしていると、一人の女生徒が近寄って来て。

「名前ば教えて？席ば探してやつっけん」と笑顔で話しかけてきた。

綺麗なセーラー服を着て、綺麗な顔をした治の中学にはいないタイプで都会的な女の子であった。

治はドッキとしながら、

「伊藤治」とだけ言った。

その瞬間、教室が凍った。「都会的な」女の子も目を真ん丸にして治をまじまじと見ている。

その時教室の扉がガラガラと開いて、背広姿の大人が入って来た。

治は「多分先生だろう」と思ったが確信は無かった。

その大人が、

「おはようー座る席は皆わかってるか？」と聞くので

先に来ていた生徒たちは口々に「はい」と返事をする。

治はまだ分かっていないから黙っていると、

治に向かってその大人が「君は？分かっていないのか？」と聞くか

ら治は頷いた。

「名前は？」

「伊藤治です」

その大人も名前を聞いたとたんに、治の顔を見直す。

「君が伊藤君か〜君の席はあそこ」と窓際が一番後ろを指差す。

治は黙ってその席に行くと机の上に

「伊藤治」

と書いた紙が貼ってあった。

あじ

自分の名前が書いてある、窓際の席に座ると治は外を見た、
1年生の教室は学校の一番奥の少し小高い場所にあり4階建ての4階部分になっていた。

2年生が3階部分、3年生は別棟。

治の席から窓の外を見ると、高校のほぼ全体が見えた、
巨大なビルの校舎が3棟見えて、横には青い屋根の立派な体育館が見えた。

各校舎や体育館等をつなぐ廊下であろう道には「天井」が付いている、

なんだか秘密基地みたいに治は感じた。

その先に中学の10倍はあるだろうかと思える広いグラウンドが有って、
そのグラウンドを取り囲むように大きな木がきれいに並んでいる、
その木の横には綺麗な道路が有って、学生服を着た生徒がまだ大勢歩いていた。

並木の終点が校門になっている。外に出るとバス停が有ってその先は道路を挟んで海。

なんだか、テレビで見た世界のように治は感じた。

しかし、治の教室から見える海は、はるか遠くの海であった。

村の中学校は木造の古びた2階建て、もちろん村には3階建ての建物自体存在しない。

中学時代は教室の窓から狭いグラウンドを挟んですぐに海が見えた。

学校から見える海の300メートルぐらい沖合に、村の「定置網」があり、朝と夕方に、

網を「揉んでる」小舟が見える、
村の大人たちが20人ほど乗って、船の片側から定置網を船の中に
手繰り寄せて上げて行く。

定置網とは分かりやすく言うと、お椀をひっくり返したような形の
巨大な網を海の中に仕掛けておく、
仕掛ける場所は大体潮の流れが緩やかな場所、そういった場所は魚
の通り場所でもあるから、

魚が間違えて、定置網に入って出れなくなってしまう。
出れなくなつた魚を逃がさないように（一度入った魚は出れないの
であるが）

2か所か3か所から、船で一齐に上げて行くのである。

まあ「いわゆる「原始的な漁法？」」である、似たような漁法は世界
のいたるところでもやっている、
それこそ、アフリカでも南米でも、太平洋の名も無い孤島の原住
民でもやっている。

たまには信じられないほどの大物も網に入っていたりする。

治の村の、大人たちは殆どが定置網に乗っている、ヒロちんの親も
もちろん治の親も乗っている。

しかし、同じくほとんどの大人は、当然、ヒロちんの親も、治の親
も、小さいけれど自分の船も持っている。各々が、それで漁に出て、
それで生計を立てている。

それとは別に朝夕は定置網をするのである。

定置網は村の漁協が管理している。定置網でとれた魚の殆どは、
村の食卓に回る。

早い話が、売り物になるほどの魚はあまり取れないと言う事だ。

だから、治の家でも毎日ご飯のおかずは「魚」中心である。
治だけではなくおそらく村の子供全員が

「魚恐怖症」であったはず、と治は思っていた。

余談ではあるが、治が子供の頃に村では、「太刀魚」は「食べない魚」であった、網に掛かっても全部港で捨てる。

野良猫でさえ見向きもしない、治は大学生になって都会に出て太刀魚を食べると聞いて、びっくりした。

定置網を上げてる事を治の村では「揉む」と言う。

雨の日も風の日も冬の寒い日も波の高い日も、大人たちは定置網を

「揉みに海に出る」

その姿が、中学校からはよく見えた。

冬になると、「トビウオ」がよく獲れる、冬に学校から見ていると、

トビウオが大量に獲れるとすぐにわかる、そうすると治の村の子供たちは、殆どが顔をしかめる。

何故なら、トビウオは治の地方では「あご」と呼ばれて、塩漬けにして干して乾燥させて。

「出汁」にしたり「焼いて」食べたりする、保存食である。

勿論村を出て都会で仕事をしている家族への「田舎の香り」の送り物の代表格でもある。

事実、集団就職で田舎を出て盆正月に里帰りした「都会人」達は皆「あご」が嬉しいと言う。

その「あご」の塩漬けは大体の家庭で、子供の仕事である。

獲れる季節は冬、大量に獲れた「あご」が村の各家庭に配給される、配給された「あご」は家の前に無造作に置かれ、子供の帰りを待っている。

子供たちは家に帰ると、まず「ソツ」とする、それから大量の「あご」を一匹一匹水道の水で手洗いしながら、この子供も器用に包丁で内臓を取って行く。基本的に「うるこ」は取らない（取っていたらおそらく、発狂するだろう）

寒い冬、指がちぎれそうになる。

水洗いが終わったら、今度は、大きな樽に頭を突っ込んで、これまた一匹一匹円を描くように並べて行く。

一段並んだら、その上に塩をまいて、またその上に円を描くように並べて行き塩をまく。

その作業を延々としなければいけない。

そして、数日置いて、天気の良い日に取り出して天日に干すのである。

干すための網の上に、樽ごと「ドツ」とひっくり返して適当に並べるだけだから、干すのは簡単に終わる。

そしてまたまた、数日後適当に乾いた「あご」を縄で綺麗に並べて編んで軒下や屋根裏に干す、これで完成。

この一連の作業が「子供の仕事」だ。ひと冬の間はこの作業が「大量」に待っている。

だから治の村の子供は全員「あご」が憎い。

中学校から見えて、「あご」が獲れたと感じた日は。

みんな男も女も帰り道の歩く速度はいつもの半分以下、

途中で大人と会うと、大人もその辺はわかっていて、
「こらーうんどんや、何んばしょつとかーはよ帰らんかー」とほと
んどの大人に怒られる。

子供としてみれば、
「怒られる」「あご」が待っている
「死刑宣告」みたいなものであるから、
怒られても、走るのは一瞬、
大人が視界から消えると、
歩く速度は一段と遅くなる。

それこそ、「道端の草花の研究」
でもしているがごとく、
みんなジグザグに道を歩く。

しかし、
所詮は、「あご」の世話をする羽目になるのだが、
そんな、憎い「あご」を都会に出て行った人たちは「嬉しい」と言
う。

つい数年前までは、
憎しみの存在であったはずなのに、
もちろん治たち子供も全員将来は、

「懐かしい田舎の香り」

となることは間違いないのだが・・・

1組

自分の名前の書いた紙が貼られている机に座って。

治は中学校を何故か思い出しながら、外を眺めていた。

すると、横から声が出て、治は横を向いた。

そこには、「大男」が立っていた。

大男は治に向かって。

「伊藤君じゃろ？おっが、わかっね？」と訊ねてきた。

治は、なんとなく見た事が有る大男の顔をまじまじと見てみたが、思い出せずに、

「うんにゃ、分からんばい、だっね？」と聞いた。

大男は「南中のバレー部の者んたい、試合ばしたじゃん」と言う。
ここで治は気が付いた。

この大男は、中3の最後のバレーの試合の時に、
ネット越しに見た、相手チームのセッターの顔だった。

「思い出したばい、県大はどがんやったと？」

「優勝したばい、九州大会や準優勝やったばい！」

治は「すごかねー」とだけ言ったが、内心、なんでそんなチーム
に中学生最後の試合が

一回戦で当たるんだ？

試合の相手を決める「くじ引き」をしたキャプテンであったヒロチ

んを少し恨んで、今日帰りに文句言つてやろう、と決めた。

大男は治が何か考えているのを、自分に言う事を考えてると思つていたらしく。

いくら待つても何も言わない治を見て、キョトンとした顔で。

「伊藤君どがんして？1組になつたとや？」と聞いてくる。

治は意味が分からず、「どがんして、て言われたっちゃ、おっにや、わからんばい」と答えた。

すると、二人の会話を聞いていた前の席の男が振り向いて。

「そうたい！そっはおっも気になつたつたたい」と横から会話に入つて来た。

治はますます、分からなくなつてきて。

「どがんして？おっが1組やつたらおかしかと？」とどちらにもなく聞いた。

二人は顔を見合わせて、大男の方が。

「こん学校や、一年生のクラス分けや、普通6組が一番頭ん良かクラスで、後順番になつちよつとよ」と話した。

治は、ふーんそうなんだ、と内心思つただけでそれ以上は何も思わなかつた。

しかし、二人にとってそれは凄い問題だつたらしく、

横から飛び入り参加の男が「伊藤君や、多分入試の順番や一番で入つとろつ？もん」

大男も「おっつも、そがん思つばい」と付け加えた。

治は何も答えなかった。

二人は勝手に「どがんにしてやるねー？」とか「今年は違つとかな？」等と勝手な事を話していた。

治はまた窓の外を眺めた。

まとめると、二人の話はこう言う事であった。

この高校の、1年生の普通科（ほかに電気科、商業科、家政科とあった）のクラス編成は

毎年入試の成績の良い物順に6組から5組と言う風になっているらしい。

と言う事は1組は入試結果の悪い者のクラスと言う事になるという事。

その1組に噂に聞いた事が有る「伊藤治」がいることに二人は疑問を持っていらしい。

この二人の疑問はその後、クラスの生徒の殆どが疑問と想っていたと言う事を治は知った。

治にとっては、特別な疑問ではなかった、「大人のする事なんか関係ない」と思っていた。

治は二人の話等耳に入らずに外を眺めながら、「腹減つたなあ」と思い、早く学校に着き過ぎた事に煩わしさを感じて

「明日は20分遅く家を出よう」等と考えていた。

授業の5分前にチャイムが鳴り、その5分後にベルが鳴りそのベルとほぼ同時に、

教室の前の扉が開き、小太りで四角い顔の坊主頭の大人が入ってきた。

治は、「あれ？この人見たことある」とすぐに感じた。

「はい、全員起立」と良く通る声でその大人が言うと、
クラスの皆はざわつきながらノロノロと立った。

「おはようー今日からこのクラス担任の新井です」

「音楽の担任ですから、みなさんとは授業では週に一回しか会えないけど、1年間よろしくね」

「私の出身は地元です、出身中学は西沢中学です、この中にも後輩が数名いますから、その人たちは私の顔ぐらい知ってますよね」

と言うとクラスの皆はキョロキョロと周りの生徒の顔を見だした。

治は、西沢中と聞いて「はっ」とした。

それと同時に、「新井？？」と頭の中で繰り返し、今度は思わず声が出るぐらいに驚いた。

「この人、達おじちゃんだ」

その後は、「どうして？」「確か達おじちゃんは、お寺の住職じゃなかったかな？」といういろと考えていた。

その後高校生活の注意とか、校則の事とか、授業の事とか色々和新井先生は喋り続けていたが、

治は聞いていなかった、新井先生の顔をじっと見ていただけだった。新井先生も治の視線に気が付いたのか「微かに笑った」。

学級委員長は最初、治に席を探してくれと言った「中川ひろ子」と言う女性が一人だけ立候補して、
その女性に決まった。

その他色々と決まったらしいが、結局治は何の「役」も言われなかった。

初日である今日は昼まで「ホームルーム」をやって、終わり。

治はそれすら知らなかった、それはどうやら入学案内の中に詳しく書かれてたみたいだけど。

治は読んでなかった、「ヒロちゃんめーちゃんと教えるよなー弁当要らんじゃん」と少しヒロちゃんの顔が浮かんだ。

下校の時間になって、皆が帰ろうとしている治の教室に一人の若い女性が入って来て。

「伊藤治君いるかな？」と言うから治は「はい・・・」とだけ答えた。その女性は治を見て、

「新井先生が職員室に来るようにとの事ですから、帰る準備して私に付いて来て下さい」と言う。

「分かりました」と言って治は空の弁当とまだ食べていない弁当と、ノートと鉛筆の入った「古いカバン」を持って席を立った。

朝に教室から見えた「秘密基地」の迷路のような渡り廊下をその女性の後に付いて治は歩いた。

職員室はビルみたいな校舎の一番前の校舎の一階の一番端に有った。

女性の後から入ると、驚く事に大勢の先生がいた、

女性に付いて、机の間を歩いていると、おそらく先生だろうと思う大人たちの視線を治は感じた。

新井先生の前まで来るとその女性が「新井先生、伊藤君連れてきま

した」と言い頭を下げて、職員室を出て行った。

新井先生が「おお、治よく来たな！先生はわかるよな。」と言うから「はい、達おじちゃんやろ」と言う。

「覚えちよったか、何年振りやるか？5年ぶり？ぐらいかな？」と笑いながら言った。

達おじちゃんは治の母親の遠縁で隣の村のお寺の住職をしていた。

治が小学生の頃までは良く治の村の中をお坊さんの格好で小さいバイクに乗って走り回っては、

帰り間に治の家に寄って晩御飯を食べて帰って行った。

幼い治に「治、勉強せんばぞ」と良く言っていた、小学校6年生ぐらいになると、

「治頑張って、大学行かんばぞ・・・」と言ってくれるようになった。

治はこの時中学3年生の進路の相談を達おじちゃんにすれば良かったのに、

忘れてた事を少し後悔した。

勿論母親も達おじちゃんの事は一言も言わなかった。

そんなことを考えてる治に、「新井先生」は立ち上がりながら。

「治、これから、校長室に一緒に行くぞ、付いてこんばよ」と言い歩き出した。

治は校長室になぜ、呼ばれたのかうつすらと分かっていた。

0点（白紙の入学試験）

新井先生に付いて向かった校長室は、職員室の横にあった、大きな窓が有って、そこからはグラウンドが良く見えた。

グラウンドの横の大きな木の並木道にはたぶん一年生であろう生徒たちが並木道の終点に有る、校門に向かって大勢歩いていて、グラウンドでは運動クラブの練習してる姿が見える。

野球、サッカー、陸上、テニス、ハンドボール、柔道着姿の一団がランニングしていたりもする。

窓のすぐ横を女子生徒が話しながら歩いている姿も見えた。

今日は学校自体はまだ春休みで、2年生3年生の授業は始まっていなかったの、

クラブ活動をしに来ている生徒だけであった。

さっきの職員室とは違って、とても明るい部屋だった。

赤いソファアが有って、窓際に大きな机がありそこに、頭が禿げ痩せた人の良さそうな「校長先生が座っていた」

新井先生が「伊藤治、連れてきました」と言う。

「伊藤君だね、まあ座りなさい」とソファアの方に目で案内した。

新井先生が、「座りなさい」と言う。

治は長いソファアの右端に座り、治の向かいの「一人掛けのソファ

」に新井先生と校長先生が並んで座った。

校長先生が

「伊藤君、どうだね高校は？」と訊ねたが、治は何も答えなかった。

何も答えない治を校長先生は全く気にしてない感じで笑顔で、黙って立ち上がると、自分の机に歩いて行き、手に何やらプリントを数枚持って、もう一度ソファに座った。

その数枚のプリントをソファの前のテーブルの上に置くと。

「これ、伊藤君の入試の解答用紙だよな」と治に聞いてきた。

その数枚のプリントには、受験番号と名前が「伊藤治」と見慣れた汚い字で書いてあった。

「はい、そうです」と治は答えた。

校長先生はしばらく、タバコに火を点けて黙っていたが、すぐに火を消して。

「伊藤君、君の解答用紙全部の教科、受験番号と名前しか書いてないのはどうしてかね？」と聞いた。

治は、やっぱりこの事か、と内心思い、黙って少し横を向いた。

それと同時に受験当日の窓の外の雪を思い出していた。

新井先生が、「おさむー校長先生にちゃんと訳ば、話さんね」と言う。

それでも、治は黙っていた。

校長先生が黙っている治に向かって、

「まあー良い。君の中学時代の實力からこの高校に合格することは間違いないのだから」

「今回は、教育委員会やほかの先生とも相談した結果、君は合格になっっているから、心配しなくて良いよ」と言った。

続けて校長先生が「担任は伊藤君の親戚にもなる新井先生にお願いしたから、何でも相談するように」

と言い、新井先生に向かって「今日はこれで良いですよ、よろしくお願いしますね」と言う。

新井先生が「分かりました、ありがとうございます」と頭を下げた。

二人して校長室を出ると、「治、これから頑張らんばぞ」と新井先生が治に言った。

それと「今日は帰っていいぞ」とも言った。

治は「はい」とだけ返事して、古いカバンを手に持って校門に向かって歩き出した。

何を考える訳でもなく、ただ心の中が真っ暗な感じになる事が有るのを、治は初めて知った。

「なんで、〇点で合格したんだろう、不合格で良かったのに」

そう思いながら歩いていった。

校門の前まで来たら、カバンと風呂敷包みを両手に持ったヒロちゃんが立っでいて。

「15どこに行ちよったと？ずーっと待ちよったとよ」と泣きそうな顔で治に言う

治はそのヒロちゃんの泣きそうな顔が可笑しくて、思わず笑ってしまった。

ヒロちゃんは何が可笑しいのかわからない様で。

「バスや何時かな？弁当やバスの中で食ぶつか！」とヒロちゃん言うから。

「そつやなあー」と治が答える。

笑顔で話しながら、バス停に向かって二人は歩いた。

反抗

次の日も朝からヒロちゃんと2時間半歩いて学校へ向かう。

その日は二人とも家を出る時から、カバンを背負って準備万端。ヒロちゃんは初日と同じく、弁当は風呂敷に包んでいる。

初日と違うのは、弁当の風呂敷を「腰に」ぶら下げている事。

手ぶらになった事で、二人は快調に歩く事が出来た。途中で一つ目の弁当食べて。

道中、ヒロちゃんが「15さあー下宿は探してもらいよっけんさ」と言う。

治は「だつにや？ヒロちゃんげえん、かーちゃんにや？」

「うん、15が分も探すち言うちよったよ、良かとやる？」

「うん良かよ、二人で下宿すつか」

等と下宿の話などをして歩いた。

ヒロちゃんも治も毎朝二時間半も歩くのは無理だと思っていた。

下宿の話が終わると、ヒロちゃんが

「15宿題したとや？」と入学式の日にもらったプリントの中にあつた「勉強課題」の事を聞いてくるから治は

「したよ、ヒロちゃんや？」

「やったばってん、分からんやったけん、適当たい、15や分かつたんな？」

治は英語以外殆どわかっていたが、

「うんにゃ、おつも分からんやつたよ」と答えて見せた。

「15ちよこつと、ノートば見せてくれんね」

「ノートにゃ、なんも書いちよらんよ」

「そつで？良かとやるか？」

「良かつちやなかと？」

その後クラスの事や、担任の事などいろいろ話てる内にバス停に着いた。

満員のバスに乗り始業時間より40分ほど早く学校に到着。

二人はそれぞれのクラスに別れた。

1組のクラスに入るともう既に10名ぐらいの生徒が来ていた「学級委員長のひろ子」も来ていて。

「伊藤君おはよう、早かとね」と話しかけてきた。「うん」とだけ答えると治は自分の机に座って、外を眺めた。

沢山の学生が歩いているのが見えた。

チャイムが鳴り、ベルが鳴って「新井先生」が教室に入って来て。

朝のHRホームルームが始まった。

「今日から授業が始まります。中学と違ってスピードが速いはずだからしつかりと授業を聞くように！」

「時間割は昨日配ったから、各自分かってるよね？今日の一時間目は英語になっているから、吉野先生と言う男性のとても優秀な先生ですよ」

と話してくれた。

治は「英語かー」と苦々しく感じた。

それから20分後高校生初めての授業が始まった。

担当の吉野先生は神経質そうに左の眼の下を「ピクピク」させて話す年齢は32歳だと自己紹介で言っていた。

出身は同じ長崎県だけど「本土」の方だとも言っていた。この高校は2年目の先生であった。

一番後ろの治の所からでも、顔がピクピクしてるのが分かる。

吉野先生は、その後全員の名前を呼んで起立させて一人一人の顔をゆっくり見て行った。

治の時は「伊藤君は少し英語が苦手そうだから、ビシビシ鍛えてあげるから、覚悟しなさい」と笑顔で言った。

治は無表情だった。

全員の名前を呼ぶのが終わって。吉野先生が「全員課題を提出して下さい」と言ったのでクラスの皆はノートを後ろから集め出した。

治はノートになんかやって来てなかったなので、前の席の男子生徒に「ノート持ってきてちょうらんけん」と小声で言っただけ。その男子生徒から集めだしてもらった。

全部の列のノートが先生のもとに届けられて、それを見た先生が

「伊藤君、ノートは？」と聞くから「持って来てません」と答えると

「忘れたのか？明日持って来て」と言うから治が「いや忘れたわけ

じゃないです、ノートにやってません」と答えると、先生の顔色が変わった。

「どういう意味なんですか？」と先生は聞いた。治は黙っていた。

すると突然大声で「前に出てこい！」と言う。クラスの全員がたぶんびっくりしたと思うが、治は内心「舌打ちして」言われたままに前に出て行った。

先生の前に立つと、先生が、

「伊藤、宿題しなかったのか？」

「やりました」

「だったら、ノートあるだろう」

「ノートにはしませんでした」と言うと、急に、

「言い訳するな！」と怒鳴り手に持ってた分厚い辞書で治の頭を殴った。

治はそれほど痛くはなかったが、顔が熱くなるのが分かった。

その後も、吉野は顔面を引きつらせながら、何か怒鳴っていたが、治の耳には届いていなかった。治は熱くなる自分を抑えていた。すると、もう一度辞書で殴られた。

その瞬間、治の中で何かが切れた。

「先生、なんばすつとね？どがんに叩かれんばね？」と聞いた。

「宿題をしてないからだろう!!」と怒鳴った。

「宿題ばしてこんやったら、叩かれんばね?」

「してこないお前が悪い!!」

「悪ければ、叩かるつとね?」

「当たり前だ!!」と治に詰め寄る

「なんで宿題ばしてこんば、悪かとね?」

「して来いと、入学案内に書いてあつただろう!!」

「したよ」

「ノートは?」

「頭でした」

「それが言い訳だと言つんだ!!」と一向に収まる気配のない大きな声でとなり散らしている。

「何のための宿題ね?」

「皆の学力を上げるための宿題だ!!」

「ここにいる全員が同じ宿題で学力が上がるとね?」と治が言つと。

「・・・」

「先生どがanne、おつが質問に答えてくれんね」「全員同じ宿題で学力の上がるとね」

吉野は赤い顔をして顔面を引きつらせながら、

「もう良い、席に戻れ」とまた怒鳴る。

治はいよいよ、腹立たしくなって。

「先生が答えるまで戻らんばい」と言った。

先生は治の胸ぐらを掴んで「何だとー」と凄んで来た。

治は「先生と喧嘩する気持ちなんか無かけん」と顔色一つ変えずに言う。

治はその後も続ける、

「宿題はどがんでん良かばってん、どがんしておつが頭ば二回も叩くとね」

「がっこの先生ちゃそがん偉かとね？」

「怪我でんしたらどがんすつとね？うんが（お前が）責任取れるとね？」

「高校ち言う所や、そがん所ね？」

「はよ、おつが質問に答えてくれんね」

先生は青ざめた顔になって、黙ってしまった。

しかし、治はまだ収まらない、

「うんが（お前）価値観ば押しつくんな！おつや学校の先生ごちゃつとに、成つ気や無かとやけん」

「うんや、黙って英語ば教えれば良かとやる！！おつが、頭に入ってくんなー」

先生は全くの無言、

治は「謝れよ」と求めた。

先生無言、

今度は治が怒鳴り出した。

「謝れち、言うつつじゃろがー」

・・とその時、ひろ子が「伊藤君、もう良かたい、授業にならんけん」と声をかけた。

治も委員長の声で我に返った。

クラスの皆に対して「かんべんね」と言って。自分の席に戻った。その授業中、治は外を見ていた。

授業が終わって吉野が教室を出て行くと。

皆ざわざわと話し出す、もちろんさっきの「事件」の事を。しかし、誰も治には話しかけて来なかった。

休憩時間は10分。残り5分ぐらいになった所で、昨日治を呼びに来た若い女の人が、教室に入って来て

「伊藤君新井先生が呼んでますから、職員室まで来て下さい」と教室に向かって声をかけた。

治はどうして呼ばれるのか分からなかったが、昨日と同じように女の子の人に付いて

「秘密基地」の渡り廊下を歩いて職員室に行った。

途中で、女の人が笑いながら「伊藤君、なんばしたとね?」と治の方を見て話しかけた。

しかし治は何も答えない。

職員室に行くと、新井先生が「治、吉野先生に食って掛かったんだって?」と険しい顔をして聞く。

「うんにゃ、少し話しただけばい」と治は事もなげに言った。

新井先生は「分かった、授業始まるから戻りなさい、昼休みに弁当食べたらすぐに私の所に来なさい」

「はい」と答えて治は教室に戻った。

教室に戻ると授業が始まっていた。次の授業は「数学」であった。

白髪頭の先生が「伊藤君早く席に着きなさい」と言うから、治は席に着いた。

神経質そうな、白髪頭の数学の先生の名前は「水野」と言うらしい。

水野先生も「宿題を集めた」もちろん治は出せない。

しかし、水野先生はそのことに対して何も言わなかった。

とその時「先生!!」と一人の生徒が声を出した。 治である。

「宿題出したらんばってん、良かとね?」と少し挑戦的に治は聞

いた。

水野は「ああー吉野先生から聞いたよ、まあー君の数学の実力は分かってるから良いよ」と言う。

治はまた熱くなって行く自分が分かった。

「先生、実力が有れば良かですか？」と聞いた。

その質問を聞いて水野が熱くなって大声で、「宿題提出しても無いのに偉そうに言うな！！」と怒鳴る。

治は、内心「これがこいつの本性か」と思いその後は黙ってしまった。

数学の授業中は治は一度も前を見なかった。

高校一日目、、、治は中学時代に心に溜めてた大人への反感を初めて言葉にした。

確かに中学時代も先生に対する疑問は沢山あった。しかし何も言わなかった。

何故なら、中学は進学する生徒もいれば、しない生徒もいるだから言わなかった。

でも、高校は違うと思っていたから。

高校は「皆来たくて来ている、だから皆やって当たり前だと思っていたのである」

それが、先生達は、「させようと」「する。

これが治には理解できなかった。

治の中に「反抗」が芽吹いた瞬間でもあった。

海岸

数学の時間が終わり、休み時間。

治は学級委員長のひろ子の所に行き。

「早退すっけん、また昼の授業から出るけんね」と伝えた。

ひろ子はびっくりして。

「どがんしたと？具合でも悪かと？」と言う。

「うん、頭の痛かとき」と言つて、弁当の入ったカバンを持って教室を出て行つた。

向かった先は、校門の外に見える海の傍の海岸、

治は海岸の道路からは見えないような場所を探して学生服のままそこに寝転んだ。

季節は4月まだ少し肌寒いが海からの風が心地良い。

高校の前の海は、大きな入り江になっていて、今は引き潮で、海岸が広くなつていて

高校側から流れ出てる川と言つか、
「どぶ川」が海に向かって流れて行っている。

その周りは汚らしい、
「どぶ」になつていた。

その頃の治の島は下水の普及は限りなくゼロだったので、生活排水はどここの村でも海に流れている。

生活排水の流れ出ている近くは、とても汚く、嫌な臭いもした。
勿論その近くでは泳げなかった。

高校の前の海も同じであつた。

治の村と違うのは、住んでいる人が多いために、生活排水も多い。

だから、海もかなり汚れていた。
入り江全体が、汚れているように治は感じた。

生活排水が流れている所から離れて治は横になったので、その辺りはかろうじて綺麗であったが、
治の村の海とは比べ物にならなかった。

それでも、海は治の好きな場所でもあった。

しばらく横になっていると、朝早くに家を出て来たので、治は眠く
なってきた。

ウトウトしていると学校の方からチャイムが聞こえた。3時間目の
授業開始のチャイムである。

3時間目は確か、社会だったと思ったが、治は気にもせず、寝
てしまった。

3時間目が終わるチャイムで治は目が覚めた。
相変わらず海からの風が心地良い。

治は枕にしていたカバンから弁当を取り出して食べる事にした。
その前に喉が渴いていたので、周りをキョロキョロと見渡すと。
校門の前に道路を挟んで、車の整備工場みたいな建物の裏側が見え
た。そこまで歩いて行って。

水道を見つけると蛇口に口を付けて栓をひねって水を飲み、学生服
の袖で口を拭きながら、
さっきの所に戻り、弁当を食べた。

食べ終わった頃にまたチャイムが鳴った。4時間目の始まりのチャ
イムだなあーと治は思ったが、

今度は、何の授業かさえも気にならなかった。

弁当を食べ終わると治はまた寝転んで空を見た。雲一つない綺麗な空が見えた、空を見ながら、中学の頃の同級生の事を思い出していた。

船に乗っている奴もいれば、都会に出て行った奴もいる、皆何してるのかなあ、

治は見たことも無い、友人たちの今いるであろう環境を想像しようとしたが、全く想像すら出来ない、

想像できない自分がとても、小さいものに感じて仕方がなかった。

しばらくして、治は「そろそろ4時目終わるな」と思い学校の方に向いて歩き出す。

海岸から道に上がって行くと近所のおばさんが、じつと治を見ている。

治は気にもせずに校門に入って行き、誰も歩いていない並木を抜けて、職員室に向かった、

横の広いグラウンドでは、何年生か分からないが、体育の授業をやっていた。

まだ4時間目の授業中であった。

そんな事は全く気にもせずに、治は職員室のドアを開け新井先生を探して、見つけると。

そちらに歩いていき、新井先生の前に立った。

カバンを手にした治を見て、

「治どこに行ってたんだ？具合悪かったのか？」新井先生が聞く。

「はい、海の傍で寝ちよったよ」と治は言う。

授業中は校外に出たらだめだと教えてくれた。

「まあー良い」と言つて。新井先生は立ち上がつて「ついておいでと言つて歩き出した。」

職員室を出て、別の部屋に入つて行つた。

「生徒指導室」と書いてあつた。

中に入ると、細長い部屋に机と椅子が置いてあり。

新井先生は奥に座り、治は机を挟んで正面に座るように言われた。

「治、どうして吉野先生と水野先生にあがんな事は言つたとや」と切り出した。

治は答えなかつた、答えなかつたと言つよりも何と答えて良いのか分からなかつた。

新井先生は黙つてタバコに火を点けて、黙つてタバコを吸いだした。

静かな「生徒指導室」に4時間目終了のチャイムが壁につるしてあるスピーカーから流れた。

治が口を開いた

「先生、話の無かとなら、戻つて良かね」

新井先生は少しビククリした顔でタバコを消して「待て、まだなんも話してなかる」と立ちかけていた治を制した。

「治、小さいころのお前はもつと素直だっただろう、どがんとしたとや？」

「別に変わちよらんばい・・・」

「治、高校嫌いか？」

「別に、何とも思っちよらんばい」と治は言った。

新井先生は困った顔になって。

「治、学校の先生も皆お前に期待しちよつとぞ。頑張らんばい」

「水野先生も吉野先生も校長先生も皆やぞ！」と言っから。

「どがんとして、そがんに期待すつと」と聞いた。

「それはこの学校から初めての東大生が出るかも知れんと思ちよつとぞ」

「東大にや、行かんよ」

勿論今の治は東大の事など全くと言っていいほど知らなかった。ただ、「東大にだけは行かない」と言う気持ちは中学の最後の方から確かに有った。

新井先生が「どうして」と聞いたが、それには治は答えなかった。

話は全くと言っていい程会話にならなかった。

新井先生が「とにかく治、良かか授業だけは真面目に受ける、分かったか」と言っから

治は「分かった」とだけ答えた。

新井先生は「もう良かよ、教室に戻らんね」と言っ、治は黙って生徒指導室を出た。

進路指導室を出ると、大勢の学生が廊下にいた、多分2年生とか3年生であろう、大人びた学生たちばかりであった。

職員室と進路指導室の間に良く見ると「購買部」と言う看板が有つて、

腰の高さぐらいの窓の向こうにパンやら、ノートやら売っていた。横にはガラスケースに入った牛乳とか、ジュースも売っていた。

窓の向こうの、狭い所には母親ぐらいの人が立っていて、忙しそうにしていた。

購買部の周りには大勢の生徒がいた。

治は珍しくて、少し見ていた。

しかし手にカバンを持って「生徒指導室」からこんな時間に出て来た治を

他の生徒も見ていた。

一番グラウンド側の職員室のあるこの校舎から1年生の校舎のある一番奥まで秘密基地のような通路を歩いて約5分ぐらい。

一年生の教室のある校舎に戻ると、大勢の生徒が廊下で話していた。治は気にもせず1組の教室に向かっていると、

後ろから「15」と呼ばれた。 ヒロちんの声だ。

振り向くと知らない男子生徒と、ヒロちんが走って来た。

ヒロちんは「どがんしたと？」とカバンを持った治を不思議そうに

見て言った。

「どがんもせんばい」と言うつと。

笑顔でヒロちゃんは「こつや、木下ち言うつとよ」と横にいる男子生徒を紹介してくれた。

木下は、ぺこりと頭を下げた。治も笑って「よろしく」とだけ言うつて。自分の教室に向かった。

1組の教室の前にも1組の生徒が大勢いて廊下のあちら、こちらで話していたが、

治の姿を見ると皆、治の顔を見た。

教室に入り自分の机に座ると。

例のバレー部の「大男」が近づいて来て「伊藤君どがんしたと？」と聞いてくるから

「どがんもせんよ」と治は言った。

大男は横の椅子に座って、自分の名前を言って自己紹介した。

この男、名前は山崎勝也と言い、高校に入って初めての友達であった。

数日後、治は勝也の事を「ジイ」と呼ぶことにした。

それは「大男」「ジャンボ」「J」「ジイ」である。

勿論クラスの皆も「ジイ」と呼ぶようになる。

ジイは体が大きくて、頭はたいして良くないが、運動神経は抜群で、走ってよし、球技よし、力も有るし、柔道も強かったある時などは体育の時間の段取りで柔道部の黒帯の生徒にも勝つほどであった。

見た感じは真っ黒に日焼けして坊主頭だったせいもあり。とても怖い男にも見えた。

事実1組の女子生徒からは、かなり敬遠されていた。

男子生徒に対しても、かなり横暴な所が有ったために敬遠されることが多かった。

女子生徒からの敬遠はこれから、3年間変わらないものになる。いつも彼女を欲しがる

「暗い？高校生活」を送る事を今のジイは知る由も無かった。

でも、なぜか治とは気が合った。3年間偶然にも同じクラスになり。お互いの家に泊まりに行く関係になる。

治はその後ヒロちゃんが1組に大声で「15!!」と叫びながら入って来たのをきっかけに

クラス全員が「15」と呼び出したり。

クラス委員長のひろ子が治の事を好きだと『発表して』ひろ子との仲を噂されたり。

最初は皆「秀才」とか「天才」とか、の先入観を持っていたのが、2週間もすると普通に治と話すようになっていた。

治も少しは高校生活が楽しくなってきた。

しかし、殆どの授業時間は外を見ていた。

来客

数日後の日曜日昼過ぎ、担任でもある、達おじちゃんが治の家に来てきた。

上下ジャージ姿、それも高校のネームの入ったジャージ姿で、昔坊主の格好をして村を走っていた時の小さいバイクに乗ってやって来た。

父親はいなかったが、母親はいて「達ちゃん、どがんしたと？」と出迎えた。

治は丁度、朝と昼の兼用のご食事を済ませたところであった。母親の声にびっくりして振り返ると、「新井先生が立っていた」

「ねえちゃん（治の母親の事をそう呼んでいた）治のこっで、話んあつたけんさ」と言う。

母親は、何を言ってるのかさえ分からなかった様子であった。

母親は達おじちゃんが、高校の先生をしてることを全く知らなかったみたいだ。

新井先生は玄関で靴を脱ぐと部屋に上がって来て、治の寝転んでいるテーブルの横に胡坐をかいて座った。

母親が、お茶と焼いた「あご」をテーブルに運んできた、「治も食ぶっね?」「うん」と答えると

台所に戻って「あご」を焼きだした。

治は起き上がって、ちょうど新井先生の正面に向かい合う形で座った。

屋根裏の自分の部屋に戻ろうと思ったが、母親に、「あご」を食べ

ると言った手前戻れなかった。

硬い焼きあごを両手で食べながら、新井先生が母親に
「ねえちゃん、実は3年前から南高校（治の高校である）の先生ば
しちよつとよ知らんやつたるう？」と言つと。

母親が台所から、「へー知らんやつたばい、治は知つちよつと
ね？」と聞く。

知ってるも知らないも、担任である、知らない訳がない。

治は母親にも父親にも達おじちゃんが担任であることは言つてなか
つたことを少し後悔した。

また、父親に怒鳴り付けられるなあーと思つたからだ。

母親の治に対する質問には達おじちゃんが答えた。

「おつが、治ん担任ばしちよつとよ」と台所の母親に向かって大き
な声で言つた。

焼いたあごを皿いっぱい積んで、母親が台所から戻りテーブルに
置き自分もテーブルの横に座つた。

「治、どがんして教えんやつたとね？」と聞く。「忘れちよつた、
」と答えると。

「最近何も話さんごてなつたとよ」と達おじちゃんに言つた。達
おじちゃんは
「ねえちゃん、そつは仕方んなかたい、年ごろじゃもん、なあー治」
と言つてくれた。

新井先生は、母親に治に対する高校側の期待とか将来の事とかを話していた、

母親は、分からないながら取りあえず話を聞いていた。

治はまた寝転んで母親の焼いたあごを食べていた。

話の途中で母親が「治、大学行こごちやつとね？」と聞いてきたので、「何もわからんばい」と治は答えた。

新井先生が「ねえちゃん、絶対に行かせんばよ」と言つと母親は困った顔になり、

「とーちゃんと相談せんばね〜」と、何と答えて良いのか分からない風だった。

母親は新井先生に「治は大丈夫ね？」と聞くと達おじちゃんは「何がね？」と聞き返す。

「治ん成績で大丈夫ね？そつが心配でさー」と言つ。母親は治の学力を心配したのである。

「ねえちゃん、治は南高始まつて以来の秀才と言われちよつとよ、何も心配せんで良かとよ」と言つと。

母親は「そがんね、そがんなら良かとばつてん、」と不安そうに言った。

治は相変わらず寝転んであごを食べながら、聞くともなく二人のやり取りを聞いていた。

治は食べながら、起き上がり自分の部屋に戻ろうとした、その治を見て新井先生が、

「治、勉強部屋ば見せてみんね」と言つて自分も立ち上がった。

治は黙って、屋根裏に行くための階段のある廊下に向かった。

階段と言うより、梯子に近い階段であった、それは治が中学2年生の時に屋根裏に自分の部屋を作った時に
近所の古い家を壊した後から貰ってきた階段であった。

最初治が作った時は、天井に穴をあけて階段を掛けて、屋根裏にベニヤ板を打ち付けて

これも近所の古い家を壊した時にもらってきた、畳を3枚置いただけの

最初は窓も無い暗い只のベニヤ板の箱であったが、父親が家の壁をくり抜いて窓を付けてくれた、

そのお蔭で、とても快適な「治の空間」になった。

しかし、屋根裏だけあって、夏冬構わずに一年中、色々な虫たちと「同居」を余儀なくされた、

夏などはまれに、「青大将」等も迷い込んでくることもあった。

治の後に続いて達おじちゃんも部屋に上がってきた。

丸い古びたテーブルと本立てと、たたんだ布団、壁には制服が吊るしてある。

反対の壁には治がとても気に入っている「イージーライダー」のポスターが貼ってある。

このポスターは都会から帰ってきた近所の人のお土産だった。

天井には丸い2連の蛍光灯がぶら下がっていた。

壁も天井もただのベニヤ板の箱、

壁の一方に大きな窓が有る。この家で唯一のアルミサッシが付いている窓である。

「良か部屋じゃん」と達おじちゃんが言いながら、窓を開けて外を見た。
窓の向こうはすぐに海が見えた。治は勉強しながらこの窓から見える海が大好きだった。

窓を開けて、達おじちゃんがタバコを出したので、

治は部屋の隅の夏に使ってた蚊取り線香の缶を、テーブルの上に黙って置いた。

「治、何か嫌な事でも有ったとか？」

「いや別に何もなかばってん」

「聞くと、学校に教科書も持ってきちやらんごちゃけど」

「教科書や春休みに全部見たもん、それに朝、重たかもん」

「そっぴや、朝は歩きよつとて？」

「うん」

「下宿せんとか？寮も有つぞ」

「下宿ば探してもらいよるよ」

「早よせんば、きつかる？」

「うんにや、大丈夫ばい」

達おじちゃんはタバコを吸いながらテーブルの横に重ねておいてあった教科書を手に取ってペラペラ見ながら、話していた。

急に「治はタバコは吸わんとか？」と聞いてきた。

治はびつくりして、「……吸うよ……」と小さい声で答えた。

治がタバコを吸う事は母親も父親も知っていた、と言うか村中の人
が知っていた。

治の村は中学校を出るとほとんどの子供が、都会に出て行くか、地元に残って遠洋漁業の船乗りか大工の丁稚。と言っものが多かった。

実際問題として、村の各家庭の家計は「子供の仕送り」で成り立っていた。

だから、中学を出ると子供は皆大人扱いである
タバコもお酒も、男の殆どが中学を出ると当たり前のように吸ったり飲んだりする。

事実中学を出た春休みに、進学しなかった友人の家に行くと、その母親は（どこでも一緒だが）灰皿と、お酒（焼酎がほとんどだが）を出してくれる。
だから、タバコもお酒も普通である。

これは、達おじちゃんの村でも同じはずである。

勿論、治は高校に行ったから、親の前では遠慮している、

しかし父親は夜になると治に焼酎を飲ませたがった、たぶん一緒に飲みたかったのだろう。

でも、治は高校卒業するまで父親と飲んだことは無かった。

都会に出て行った友達が帰って来て家に遊びに来て、治の父親と飲んでも治は横でジュースを飲んでいた。

友達の家では友達の父親とは喜んで飲むのだが、自分の父親とは飲めなかった。

治が父親と初めて飲むのには、高校卒業して7〜8年の時間が必要

だった。

「学校でタバコ吸ってるのが見つかったら謹慎やからな、学校でや吸うなよ」

「うん、分かっちゃよ」

「治、高校ば辞めたらだめぞ」と言った。

治は正直びつくりした、自分の心の底を見透かされてるような気がした。

「・・・分かっちゃよ・・・」とだけ言った。

それだけ言うと達おじちゃんはまだ、小さなバイクに乗って帰って行った。

達おじちゃんが帰った後、一体、新井先生は何しに来たのか、治は考えた。

しかし、分からなかった。でもこの先の3年間。

治は、『新井先生』がいなければ間違いなく高校を辞めていたであろう。

3年間何か問題がある度に、『達おじちゃん』が収めてくれた。これが良かったのか悪かったのかは別にして。

治にとって「新井先生」が疎ましく感じた事もあったのは事実だ。

その日は案の定。

父親に、怒鳴り付けられて、終わった。

恋心

ある日の昼休み、治は先日見た「購買部」にジイを連れて行ってみた。

初めて見た日と同じように沢山の生徒がいた。殆どが上級生だと感じた。

ジイが「何ば買うと」と聞いてくるが、別に何を買うわけではないから、

「別に見に來ただけばい」と言う。

帰ろうとしたその時後ろから、「おさむー」と女性の声。

振り返ると憧れのバレー部の「先輩」だった、入学式の通学路で会ったつきり会って無かったから、

治は嬉しかった。

購買部の周りにいた人達の数人が声の方を見ていた。

先輩が笑顔で治に近づき「どがんね？学校は？」と聞いてきた。

「うん、」と治は言う。

「この子、私の友達の京子！この前会ったから知ってるよね！」と横の友達を紹介してくれた。

入学式の日は全くその京子と言う2年生の女生徒には治は気が付いてなかった、と言うより顔を見てなかった。

「こんにちわ〜」と京子が笑う。その笑顔を見て治は、ビックリ

した。

小柄で、ショートカット、目が大きくて、色白。セーラー服姿が可愛い。

治は先輩に対しての憧れとは違う何かを瞬間的に京子に感じてしまった。

「一目惚れ」であった。

京子は「伊藤君凄いだってねー」と言う。

「何がね？」と治。

「頭良いんだって？」

「そがん事、無かよ」

「皆知ってる事やもん」と笑って京子は言う。

治はこの時初めて

「男」として「京子」を好きになっていたのだった。

報復（殺意）

早朝弁当を持って山道をヒロちんと歩くのが日課となって、約2週間後のある日

朝何時もの様に海の見える山道を歩いているとヒロちんが、

「15下宿ん決まったとばってん、どがんすつと〜」と云う。

「どいね？」

「高校の近くん、おっがえん、かーちゃんの従兄ち言うつとったばってんが・・・」

治は「ヒロちんが良ければ、おっや良かよ」

「うん、じゃあーそこにすっけんね」「かーちゃんに頼むけんね」と云う。

治は「分かつたばい」

ヒロちんの、母親の従兄の家に下宿が決まった。やっと朝ゆっくり寝れると二人は思った。

次の日の学校帰りにヒロちんとその下宿に顔を出した。

高校から歩いて20分ほどの所だった。

治やヒロちんの家と比べると綺麗な家だった。

家に入ると、ヒロちゃんのかーちゃんが居た。

「治、（村の大人たちは子供の事を殆どが自分の子供みたいに、愛称か呼び捨てで呼んでいた）」

ここで良かとやる？かーちゃんも良かち言うちよったけんね」と治の母親ともこの下宿の事は話してきたことを治に伝えた。

昨夜、

晩御飯を食べながら父親と母親には治の方からも伝えてあった。

下宿先の、おばさんはとても人のよさそうな感じで「遠慮せんて良かけんね」と言う。

おじさんは出稼ぎで福岡にいるらしい。子供は皆都会に出ていないことも教えてくれた。

二人の部屋は二階だった、部屋に上がってみると、広い部屋で机が二つ置いてあり、

おばさんが「机ばもろて来たけん使わんね」と近所から貰って来てくれたみたいだ、

部屋には窓が二つあって一方の窓からは海が見え、もう片方の窓を開けると高校が見えた。

とても明るい部屋だった。

その海側の窓際に机が並んで二つ置いてあり、座布団も敷かれてあった。

机の高さと窓の高さがちょうど同じぐらいで、その机の前に胡坐をかいて座って窓を開けると海がよく見えた。

海を見ながら勉強するのが好きだったから、治は嬉しかった。

その次の日に二人が学校に行っている間に、村のプロパンガス屋さんのおじさんがトラックで

治とヒロちんの家から、二人の布団やら衣類やらを運んでくれて、

その日から二人は下宿生活を始めた。

下宿生活初めての夜、二人は遅くまで話していた。取り留めもない話だが、何時間も話した。

治は都会に出て行った同級生たちもこんな感じなのかな？と考えたりもしていた。

次の日の朝、通学時間「20分」弁当も一つで良い。下宿の玄関を出ると、学生が大勢歩いていった。

ヒロちんが「15凄かねー」と一言、治も「うん、凄かー」と返す。

二人にとってそれは新鮮な光景だったのだ。

しかし、下宿生活3日後の午後に事件が起きた。

治のこれからの生涯を決定するような事件が起きてしまう。

放課後、男子先輩たち数人に治は

「リンチ」

を受けてしまったのである。

治は、放課後いつものように帰ろうと思って、一年生の教室の棟の下駄箱を開けて自分のくたびれた、革靴を履いて、秘密通路を一人で歩いていた、その時

治の前に見た事のない男子生徒が二人立って「ちょこつとこつちに来い」とそのうちの一人が治の腕を引っ張った。

その引っ張り方が思いのほか強かったので治は

「なんね」と言って振り払った。

腕を引っ張った男子生徒はびっくりして「よかけん、来い」と語気を強めて言う。

治は「分かったばい、引っ張らんでん行くけん」ともう引っ張るなと言った。

二人に付いて行くと、武道場の横の人気のない階段の所に連れて行

かれた、
そこに行くと、6人の男子生徒が学生服の前のボタンも閉めずに居た。

治を階段に座らせると、8人は取り囲んだ。

治は意味が分からずに、一人の生徒の襟の「? - ?」を見て多分二年だと思っていた。

一人の男子生徒が、

「伊藤やる?」と聞くから「そうばってん」と治は答えた。

すると違う生徒が

「少しばっか頭ん良かけんち、のぼすんなよー」と言う。

治は自分が頭が良いとも、それに対して鼻にかけてることも無いと思ってた、

しかし今、目の前に居る二年生の男子生徒達は、そうではない、と治に言った。

「別にそがん気持ちやなかよ」と言う。

一人の男子生徒が突然大声で「ふざくんナー」と怒鳴る、別にふざけているつもりは毛頭無い、

それにこいつらに怒鳴られたところで何とも思わない。

治は「ふざけちよらんよ」と言う。

横の男が突然治の右足を蹴った。治は蹴られた足を押えながら、

「何ばすつとね」と声を荒げることも無く聞く。

すると今度は後ろの男に背中を蹴られた、

治は前に倒れてしまった。起き上がりながら、治は全てを理解した。

これが「リンチ」と言うものなんだ、テレビで見た事有る、今自分がそれに遭おうとしている事。

男たちはニヤニヤしている。

治は立ち上がり、

「どがんしたら？良かと？」と聞いた。

治の質問には誰も答えずに、また後ろから蹴られた。

もう一度立ち上がり、治は言った

「顔は叩かんでよ」

その後は8人から蹴られたり殴られたりした、治は黙って丸まって辛抱していた。

しばらくして、それは止まった。治が階段の所につずくまっていたら男たちは帰ろうとして歩き出していた。

治は「もう、良かとね」と男たちの背中に向かって言った。

それを聞いて二人の男からまた蹴られた。今度はかなりきつく腹を蹴られた、治は思わず声を出しそうになったが、辛抱した。

這いつくばったままで治は、そしてまたこう言った

「もう良かと？ 終わりね？」

それを聞いた男たちの中で中心的男が

治の胸ぐらを掴み引き起こすと治の顔を力いっぱい叩いた。

治は叩かれながら「顔や、叩くなち言うたろが」と少し大きな声で言おうと思ったが
声にならなかった。

結局治は声も出ないほどに叩かれて、階段の所につずくまっしてしま
った。

気が付くと周りには誰もいなかった。

階段に座り、治は考えた。

「どつして、こんな目に合うのか？ 自分が何か悪い事をしたのか？」

答えは「何も自分は悪くない」であった。

その上奴らは「顔を叩いた」「叩くなと言ったのにもかかわらず、顔

を叩いた。

立ち上がり学生服の汚れを落とし、ちぎれたボタンを探したが見つからない、

蹴られて横の溝に落ちていたカバンを拾い上げ、全身の痛みを我慢しながら歩いて下宿に戻った。

途中で知らない先生に「どうした!」と呼びとめられても治は「何でもなかばい」と言っただけで帰ってきた。

下宿のおばさんは留守だった、二階に上がりその場に寝転んだ。

しばらくするとヒロちゃんが帰って来て、治を見てびっくりしたのか

「15どがんとしたと!」と大きな声で叫ぶ。

「どがんとせんよ、2年生に叩かれたばい」と言つと

「どがんとしてね?」と聞く。

「何もしちよらんばい」と寝転んだままで答えた。

「ひどかねー2年生ちゃ?だっね?」とヒロちゃんは治をこんな風にした相手を聞いてきた。

「知らんばい」と治は答えた。

「いつね?」「30分ぐらい前ばい」「探してくっけん」とヒ

口ちゃんは今にも下宿を飛び出して行きそうな事を言う。

治はヒロちゃんの性格はよく知っていた、普段はオドオドした小心者の田舎者を感じるが、

実はとても正義心の強い正直な男でもあった、だから治はヒロちゃんが大好きだった。

ただし、力は無かった。腕相撲などは一緒に高校に来た村の女子生徒（岩子＝治の憧れの先輩の妹）には全く相手にならない。

治は「ヒロちゃん、良かけん、それよつかタバコば取ってくれんね」と頼んだ。

ヒロちゃんは自分の机の引き出しからタバコを出して、隠してあった灰皿代わりの蓋の付いたカンカンを持って治の前に座った。

治も起き上がり窓を少しだけ開けて、二人でタバコを吸った。

下宿に行く前日の夜にヒロちゃんの母親がヒロちゃんを連れて、治の家に来て色々と話していた。

その時二人は、治の父親に「タバコば吸うとや良かばってん、人に見らるんな！」ときつく言われていた。

だから、二人はこっそり吸う。

痛みも、ずいぶん落ち着いてきた治はヒロちゃんに、

「高校ちゃおかしか所んごちゃんね」と言った、ヒロちゃんはまだ興奮しているのか赤い顔をして

「15が悪なかつちやる？」とまだ治がこんな目にあった理由を気にしている。

治は嬉しかった。

その頃の治は身長175体重60キロも無い「華奢」な体つきに見えた。

顔は優しい顔をしていて、暴力的な感じの男ではなかった。

でも雰囲気は、寡黙で妖艶としていた。中学時代は友達も皆、治を怒らせることをとても怖がった。

実際中学時代に治は怒ったことは一度も無かった。

中学生ともなるとたとえ田舎であろうが、喧嘩はある。喧嘩の理由など些細な事だ。

取っ組み合いで殴り合いの喧嘩も当然ある、治の村だけに限らず島全体が船乗りや大工と言った

「気の荒い」大人たちの多い島であるから余計に喧嘩となると酷い。

中学の頃は治がいつも仲裁役であった、下級生の女子生徒などは泣きながら治に喧嘩の報告にやってくる。

その度に治は仲裁役である、治が「もうやめんね」と言うと喧嘩は必ず終わっていた。

勿論、治自身が声を荒げたり喧嘩することも一度も無かったし、巻き込まれたことも無かった。

その日の晩御飯の時に下宿のおばちゃんが

「治、喧嘩ばしたとね」とご飯を食べてる治に言った。

「うん」と治は答えた。

ヒロちゃんが「15や、喧嘩んごちゃつとやせんばい」と言う。

おばちゃんは笑っただけでそれ以上何も言わなかった。

次の日の朝目が覚めたら、全身が痛い。

学校には行かなかった。ヒロちゃんまでも行かなかった。おばちゃんが学校に電話してくれた。

その翌日は土曜日だった、その日も二人して学校は休み。

土曜の昼過ぎに二人して部屋でタバコを吸っていると、玄関が開いて階段を上がってくる人の気配がした。

タバコを手に持ったまま階段の方を見ると「新井先生」だった。

新井先生は治の晴れた顔を見て「治、どがんしたとや？喧嘩したとか？」と聞くが、タバコの事は何も言わない。

「どがんもせんばい」と答えると、それ以上何も言わなかった。

買ってきてくれたジュースを二人に渡して、「ヒロまで休まんてん、良かる」とヒロちゃんを叱った。

勿論ヒロちゃんも小さい時から「達おじちゃん」の事は知っていた、から黙って言う事を聞いていた。

新井先生は自分もタバコを吸うと帰って行った。

「月曜日は登校せんばぞー」

「それから、タバコは吸うのば、他の人に絶対に見つかったら駄目ばい」と言っ学校に戻って行った。

二人は黙ってジュースを飲んだ。

夜になって治は下宿の電話を借りて家に電話した。

母親が電話に出て「どがんね？下宿や？」と聞いてきたがそれには答えずに、

「とうちゃんや、おっとね？」と父親を呼んでもらった。

父親が電話口に出た、酔っぱらってる。

「なんや？」

「うん・・・」

「どがんしたつか？」酔っぱらった父親ははっきりイライラしてると分かる声になった。

「あんな、、、」

「おう、なんか？」

「2年生に叩かれたちゃんね・・・」

「どがんしてや？うんが何んかしたっか？」

「うんにゃ、何んもしちよらんよ・・・」

「何んもしちよらんとにそがんことやさせんやろ」と半ば怒鳴り気味で言う。

「ばつてが、何んもしちよらんもん・・・」

「怪我や？」

「大丈夫ばい」

「そつで？」と治が何を言いたくて電話して来たのか聞いた。

「仕返しばすっけん」と答えると

「良かったい、しいたごてせれ」と治の好きにすればいいと答えた。

治・・・

「もしかしたら、殺すかもしれんばい・・・」と言つと。

父親は一瞬黙ったが「それも治が決めんばね」と治に言う。

それっきり父親は黙って、電話の向こうで「ほらぁー代わらんね」と怒鳴って母親に電話を替わった。

母親は何もわかっていないらしく、学校が近くなって良かったねとか、おばちゃんに迷惑を掛けるなどの話をして電話を切った。

その夜治は寝れなかった。

自分は絶対に悪くない、それなのにこうなった。

学年は「? - ?」・・・「顔は覚えてる」

『殺すかも・・・』

明日は日曜日・・・

治に殺意はないが、報復に手加減する気もない。

何故なら、奴らは「顔だけは叩かんで」と言ったにもかかわらず顔を叩いた。

顔を叩いてなければ、報復とか仕返しなどは全く考えなかった、しかし奴らは、約束を破った、それも8人がかりで、

「許せない」

治は月曜になったら、8人全員を探して順番に「報復」をするつもりであった。

海輝（報復の結末）

次の日は日曜日

治とヒロちゃんは下宿にいた。

治はまだ体のあちらこちらが痛くて動きたく無かった。ヒロちゃんはそんな治の傍を離れたくなかったのだらう。

二人の絆はとても強かった。

お互い物心ついたころから気が付いたらいつも二人は傍にいた。幼稚園、小学校とヒロちゃんはいつも治の陰に隠れていた。勿論治はヒロちゃんをいつも守っていた。

同じ年なのに、治はヒロちゃんの兄貴みたいな存在だった。

そんなヒロちゃんが今は、治を心配して傍を離れようとしなない。

昼過ぎに下宿のおばちゃんが「治、友達ん来たばい」と階下から声がした。

治の代わりにヒロちゃんが下がって行き、その訊ねてきた「友達」と二階に上がってきた。

「ジイ」だった。

治の顔を見るとジイは

「15大丈夫ね」と言う。

ジイの話によれば、治が2年生に袋叩きに遭ったのは学校中の噂になっっているらしい。

治はジイの話を寝転んでタバコを吸いながら聞いてた。

ヒロちゃんはジイに「2年生のだったね？」と犯人を知りたがっていた。

ジイは犯人は知らなかったしかし、治にこう言った。

「絶対に探すけんね」「いくら2年生ち、言うたってこがん事や勘弁されんやろう」

「探して、先生に言うけん」と言う。

治はゆっくり起き上がりながら。

「ジイ先生には言わんで良かけんね」と先生への密告を止めるように言った。さらにこう付け加えた。

「相手や分かっちゃよつとよ、2年2組さ、顔も覚えちよつよ」

それを聞いたヒロちゃんは「15どがんすつとね」と聞いてきた。

治は真面目な顔をして言うヒロちゃんが可笑しくて声を出して笑った。

ヒロちゃんとジイは治がどうして笑っているのか分からないといった風で治を見ていた。

笑い顔のまま治は二人にこう言った。

「おっが、自分で仕返しはすっけん、よかと」

二人は少しびつくりした顔で黙って治の顔を見ていた。

治はタバコを消しながら、

「ジューズば買いに行こか」と言って自分の机の引き出しを開けた
が2000円しかなかった、

「ヒロちゃんお金ば持ちっちょか」と聞くとヒロちゃんは「2000円」と
答える。

それがまた治は面白くて笑った。

ジイもヒロちゃんも今度もまたなぜ治が笑っているのか分からなかつ
た。

結局ジイが驕る事になり、3人で下宿を出て高校と反対方向にある
駄菓子屋に向かって歩く、

治とヒロちゃんは三日ぶりの外の空気だった。

翌日治は四日ぶりに学校に行った。

顔は、まだ少し目の周りが青くなっていたが、腫れは引いていた。足と背中などはまだ歩くと痛い。

校門から続く校舎への長い通学路をヒロちんと並んで歩くと、何人かの生徒がビックリした顔で治を見ている。治もヒロちんも全く気にはしない。

ヒロちんは朝から治の雰囲気か怖かった、中学時代にも感じた事のない治をヒロちんだけが感じてた。

一番奥の棟の1年生の教室の並んだ4階に着くと、廊下には大勢の1年生がいた。

みんな、二人の姿を見ると急に黙り込んだ。

1組の教室の入ると、クラスの皆が一斉に治を見る、クラス委員長のひろ子が近づいて来て、心配そうな顔で

「15大丈夫？」と声をかける、「大丈夫ばい」とだけ治は答える。

ひろ子はクラスで治が好きだと発表してからは周りの目など気にせず治に対して接してくるようになった。

治もそんなひろ子に対して良く話すようになっていた、しかし今日

は話したくなかった。

ひろ子もいつもと様子の違う治が怖くてそれ以上は話せなかった。

しばらくしてジイが教室に入って来てすぐに治の所にやって来て、

「大丈夫と？」と聞くから「うん」と治は言う。

ジイは治の顔に自分の顔を近づけて「今日仕返しはすつと？」と聞く。

治は目を合わせる事無く「やる」と短く答えた。

昼休みになって治は弁当も食べずに、教室を黙って出て行った。

殆どの生徒が食事中で誰もいない廊下にただ一人、ヒロちゃんが立っている。

何も話さずに治は階段に向かって歩いた。

ヒロちゃんも何も言わずに並んで階段をさがる、

すると後ろから足音がしてジイが治の横に並んで

「おつもいくばい」と自分も付いて行くと治に言った。

治を挟むような格好で3人は階段をさがった。

行く先は治しか知らない、2人は黙って並んで歩く。

武道場の横に長屋みたいな建物が有り小さな運動部の部室が並んでいた。

その部屋の一つの前で治は立ち止まり、

引き戸を開けて中に入って行った、しばらくして治は手に「バット」を持って出て来た。

それからまた治は黙って歩き出した。

向かった先は1年生の教室のある一番奥の棟。4階が1年生、3階が2年生になっていた。

3階まで上がると数名の生徒が廊下にいたがほとんどの生徒は、まだ教室で食事中的のようであった。

廊下に出ている数名の2年生がバットを手にした治に気が付き声を掛けようとするが、

治は妖艶な目でその生徒を睨み黙らせた。

横にいるヒロちゃんもジィも治が怖かった。特にヒロちゃんは「治、やめんね?」と止めようともした。

しかし、治は表情一つ変えずに、黙って歩いた。

「? - ?」のクラスの前に来ると、2人に向かって「ここに、おらんね」と言うと

一瞬の躊躇もなく教室のドアを開け、黙って入って行った。

「? - ?」のクラスでは、まだほとんどの生徒が食事中だった、机をくつつけて食べてる者や

机の上につつ伏して寝てる者、後ろの所に集まって話しているものなど、ざわざわついていた為に

突然の来訪者の治に気が付くものは少なかつた、

また気が付いた者も、見知らぬ生徒の突然の来訪にただ啞然としていたのかも知れない。

治は教室のドアを開けて教室に入ると教室を見渡し、一人の生徒の顔を確認する。

その生徒は学生服の前のボタンも閉めずに後ろの方で壁にもたれて

ほかの生徒と話していた、

治は黙って近づき何も言わずに手にしたバットを横に振り上げた。

野球の「素振り」をするように治はその男の頭めがけてフルスイングでバットを振った。

治にしてみれば、別に頭を狙ったわけではない、たまたまほかの生徒が邪魔で頭が一番狙いやすかったに過ぎない。

フルスイングで治が振った木製のバットが人の頭に当たるとどうなるか、それは治にも分かっていた

分かっていたが、治にしてみればそんなことは全く関係なかった、

ただあるのは、

「報復」と言う意識だけ。

男は食事を済ませ教室の後ろで仲間と話している時に教室の中を歩いてくる治に気が付いた。

気が付いてから、

考え様としていた時に治の手からバットが振り上げられて自分の頭に目掛けて振り回されて来たのを見た。

瞬間的に男は頭を低く抱えて逃げた。

「バーン」と教室中に響く音がした、治の振ったバットが教室の壁に激突した音だった。

治は凄い衝撃を感じてバットを落としてしまった。

落としたバットを拾おうとした時に、治は何者かに後ろから組み止められてしまった。

動こうと思っても動けなかった、とてつもなく強い力で組み止められた。

後ろから男が「伊藤もうやめんね、わかったか」と言う治は黙っていた。

振りほどこうともがいてみたが無理だった。

もう一度男の声がして、「もうやめろ」と低い声で言われた。

治は全身の力が抜けて行くのが分かった。

この時治を制した男子生徒はこの高校だけじゃなく九州の高校の柔道部ならだれでも知っていると言うほどの男だった。

2年生で九州大会を制し、大学ではレスリングの日本代表候補に挙がるが怪我でオリンピックには行けなかった、人である。

そんな人に後ろから組み止められては治にはどうすることもできないはずがない。

その人は治から手を離すと、バットを拾って治から狙われ、青ざめた表情で座り込んでいる男子生徒にそのバットを渡し。

「こん壁や、うんがしたつぞ」「伊藤は関係無かとぞ」と言つと今度はクラス全員に向かって

「こんことや、先生に言うなよ、こつどんが伊藤ば8人がかりでや
ったとが悪かとやけん」と言った。

クラスの全員はその男子生徒の言う事が良く分かっていった。

「? - ?」の今青ざめて座り込んでいる生徒とその仲間が、「秀才」と言われている1年生の伊藤治を

集団で暴行した噂は知っていた。でも噂だから誰も問い詰めなかつた、

でも治がこうして教室にやって来て、信じれないような事件があり噂が真実であることを知った、

青ざめてだらしのない顔をしてまだ座り込んでいる犯人の男子生徒に
対して「憤り」を感じていた。

「卑怯な奴」と心の中で罵っていた。

これだけの事を起こしておきながら、この事は学校中の生徒の間の
「伝説」にはなつたが、

治は学校側や警察などの罰は受けなかつた。

それは治を止めてくれた人、『遠野海輝』 の人望であり、正義心のお蔭だつた。

遠野海輝は、2年生でありながらこの学校の男子生徒の頂点に立っていた。

それでいて、性格は温厚、学業は普通であつたが、品行方正で生徒にも先生にも人望は厚く信用もあつた人であつた。

もしもこの時、遠野海輝がこのクラスに居なければ、治の人生は変わっていただろう。

3人

1年生の廊下でヒロちゃんと別れて、治とジイは1組の教室に入ってしまった。

殆どの生徒が食事も終わり、各々に昼休みを過ごしている。

治とジイを見て、皆一応に目線を送るが、その後はまた各々の時間に戻って行った。

クラスの者は先ほどの階下での「事件」の事は知らない。

治は自分の机に戻って、鞆から弁当を取り出して食べた。

ジイは廊下側の自分の席に座って、窓際の治を見た。

何事も無かったかのように、弁当を食べてる、治を見てジイは思う。

この伊藤治と言う奴は、一体どんな奴なのか？

中学時代に凄い秀才が同じ島の中学校にいる事は先生に聞いて知っていた、それが中学最後の試合の一回戦で対戦した中学校の生徒であることも聞いた。

顔は覚えてなかったが、高校に入り同じクラスで再開した時にすぐに分かった。

その後仲良くなりはしたが、なかなか伊藤治の本性が見えてこない。

それで、さっきの事件だ。

治が教室に入って行く姿をジイはヒロちゃんと二人で開けっぱなしの教室のドアから見ていた、

治は何も言わずに、自然な感じで歩いて行き、一人の男子生徒に向

かつて、これまた黙ってバットを振り上げた。

「あつ」と思う間もない程、わずかな時間の出来事だった。

幸いな事にバットは空を切ったが、もしもあれがあのまま相手に当たっていたら、

と考えると、ジイは寒気がした、

平素の治はと言うと、あまり喋らないがとても明るく良い奴だった。学力は自分と比べると、「天と地」ほどの差が有るにもかかわらず、全くそんな感じは感じさせない。

どちらかと言うと、「こいつ本当に秀才なのか？」と感じる事の方が多かった。

ジイ自身は中学の頃は学校では誰もが怖がるいわゆる「番長」的存在だったが、

ヒロちに聞くと治は喧嘩などしたことがないと言う。

しかし、ジイは治には喧嘩では勝てない気がしていた。

何故そんな気がしていたのか、今はわかるような気がした。

今日の事件を境に「狂気」と言う言葉をジイは治の中に感じていく。

それでもその後、ジイは治の優しさや、寂しさ、秘めた思い、等と言う。今は「闇」の部分も知って行く事になる。

勿論卒業するまで、いや二人は一生の親友となって行く。

一方、遠野海輝は一年生の伊藤治が帰って行ったあと、クラスの全員に「このことは絶対に先生の耳には入れるな」ともう一度念を押

した。

クラスの全員は遠野の言葉に誰一人疑問も反論も無かった。

遠野は学校始まって以来の秀才と言われている、伊藤治は知っていた、勿論顔も見た事が有った。

でも、今日見た伊藤治は全くの別人だった、武道家の端くれとして、さっきの事件を思い出した、

「教室に、ゆらり、と入って来て黙って気負いなど無くバットを振る」一部始終を遠野は自分の席から見ていた。

「まずい」と思い駆け寄り後ろ手に抑えた時もあの伊藤治は声一つ上げる事無く、無様に抗う事などしなかった。

遠野は中学時代から喧嘩ばかりしていたからわかる事だが、喧嘩をするときは殆どの男は興奮状態になるそれが普通である。

しかし、あの伊藤治はあれだけの事をしながら、全く興奮していなかった。

武道家の遠野にしてみればそれは脅威であり、異常と感じる。

妖艶な治の姿を思い出していた。

ヒロちゃんと言った。

「15はやっぱり15だなあ」と感じているだけであった。

その頃、3人の思いなど全く知らない治は弁当を食べ終わると窓の外を眺めていた。

「昼からは、海の傍に寝に行こうかなあー」

驚嘆

治の報復事件は、瞬く間に高校中の噂となった。

入学して約一月、治の居る1年1組の前を通る人の「層」が変化した。

あの事件までは、どちらかと言うと「学業の優秀な生徒」が学年問わず通っていたが、

事件後は、俗にいう「不良」っぽい生徒が通るようになる。

どちらの「層」にしても、上級生達は、「生意気な1年生」を見に来たのであるから、廊下を凄んで歩く、

だから、クラスの女子生徒などは怖がって昼休みなどは廊下に出ない。

治もその事にはジイに聞いて知っていた、知っていたがどうしようもないのである。

自分が出て行ってもどうしようもないからだ。

5月のある月曜日の数学の時間、いつもは治を無視している数学の担任の「水野」が珍しく声をかけた、

治の席まで来て「伊藤この問題を解けるか？」と3枚のプリントを机の上に置いた。

置いたと言うより投げ捨てたと言う方が良いかもしれない。

治は水野の顔も見ずにそのプリントを手にとってみた、数学の問題

が書かれていた。

水野は投げ捨てると前に戻って、授業を始めた。

授業をしながら、一番後ろの席の伊藤治を見ていた、伊藤は最初の15分ぐらいは一生懸命何か書いていたが、

授業の途中で気が付いたら窓の外を眺めていた、水野は内心「ニヤリ」とした。

「これで少しは、天狗の鼻が折れただろう」と。

数学の授業が終わり、水野が「伊藤、さっきのプリントここに持って来い」と声をかけたが、

治は全く聞こえないのか、無視して教室を出て行ってしまふ。

水野の怒鳴り声が聞こえたが、治は無視した。何故なら、学校の先生に命令されるいわれはないと思っていたから。

水野は治の前の生徒に治の机の上に伏せて置いてあるプリントを持ってこさせた。

プリントを自分の教科書の間挟み職員室に戻りながら、治に対する怒りで、プリントの事を忘れてしまった。

夕方になり全ての授業が終わり、水野は職員室の自分の机に座り、何時ものようにタバコに火を点けて「ふうー」と一息ついた。

くわえ煙草で机の上を何気なく見た水野は、教科書の間挟まれたプリントに目が止まった。

「ああ、伊藤にさせたやつか、」と呟く、それと同時に午前中の

伊藤の横暴な態度を思い出してまた腹立たしくなっていた。

「どうせ奴は途中であきらめていたからな」とニヤリとしてプリントを教科書から抜き取って見た。

そこには、びつしりとボールペンで書かれた数式が並んでいた。水野は少し驚きながら、2枚目3枚目とプリントを見て今度は声が出ないぐらいに驚いた。

全ての問題に解答欄が足りない程の数式が書き込んであった。

慌てて、机の引き出しから

「昭和49年度第一回全国统一模擬試験、？解答、解説」の文字の書かれたプリントを取り出した。

水野は狼狽した様子で解答とプリントを見比べる、しかし治の書いた数式が理解できない、でも最後の答えは合っている。

一枚目も二枚目も三枚目も全て書き込まれている回答は、途中式は理解できなかったが最後の解答は全問正解である。

水野は頭を抱えてしまい、3年生数学担当の若い先生に声をかけて、そのプリントを見せた。

その若い先生も、水野と同じでまったく途中式が理解できない。

若い先生は「水野先生これは誰が解いた解答用紙ですか？」と聞いてくる、しかし水野は答えなかった。

水野は今年50歳になる、体が弱く召集令状は届く事無く、旧制中学の教師に就いた20歳の年に終戦となった。

その後県立高校の教師となり25年になる、その間大勢の生徒に数学を教えてきた。

中には東大の医学部（理？）に現役で合格した生徒もいた。数学においては教師としての「自信も自負」もあった。

しかし目の前のプリントの解答式が理解できない、家に帰り食事を済ませた後でもう一度眺めるが、全くと言っていいほど理解が出来ない。

理解できない理由の一つにボールペンで書かれた数字の「字」の読み辛さにもあった。読み辛い上にびっしりと書き込まれているから余計に判別できない。

その日はあきらめて寝てしまった。

翌日の朝水野が職員室に入ると3年生の数学担当の若い先生がやって来て

「水野先生もう一度昨日の解答用紙見せてもらえませんか」と言うので鞆から取り出して渡すと、

その先生は立ったまま見て、そして

「水野先生分かりましたよ、これは公式をまったく使用してないのですよだから解答用紙も足りない程になってしまったんですね」

「昨日帰ってこの回答思い出して、はっと気が付いて参考書だして調べて気が付いたんですがね。」と水野に伝える。

その後若い先生は、

「でも全部の問題を公式を使わなかったって事はこれを解いた人は公式を知らないって事になるな」

「公式を知らずにこの問題を全問正解するって事は、時間はどれくらい掛かったんだらう」

「それにボールペンで書かれている所を見ると、別の紙で解いてこちらに清書したんだな」と独り言を言いながら見ている。

その時、水野は3月の終わりに校長室に呼ばれて、学校始まって以来の秀才が入学してくると言う話を聞いた時の事を思い出していた。特に数学の能力は並外れているらしいと言う話を聞いた時に内心「中学時代に満点ぐらいの生徒はいくらでもいる」と校長の話聞き流していた。

実際過去の教え子の中にも天才は数名いた。大学受験の頃のその子たちの聡明さや、優秀さを見てきた。

しかしこの回答用紙を書き上げたのは小汚い恰好をした、まだ15歳の少年である。

それも反抗的な、田舎の「ガキ」である。

だが、過去の優秀な天才たちも水野自身の理解の範疇を超えることは無かった。

彼らの思考は少なからず水野にも理解できた。

でもこの回答は理解できなかった、目の前の若い先生に言われて「あっ」と感じるのがやっとであった。

目の前の先生に「これは誰が解いたんですか」と聞かれた声で水野は我に返った、

「1年1組の伊藤治」とだけ言うのがやっとだった、

若い先生は「あの伊藤ですか、自宅で作らせたんですね」と聞くから「いや、昨日の授業中にやらせた、奴はたぶん30分かからずに解いていたと思う」と半ば呆然と答えた。

「えっ、30分ですか。信じれませんね」と言うと水野は

「私の目の前で30分かからずに解いたんだよ」と自分では気が付かないほどの強い口調になっていた。
若い先生はびっくりして「そうでしたか、すみませんでした」と言っ
て自分の席に戻って行った。

この話は職員室でその日のうちに話題となっていた。

数学の水野先生が1年生の伊藤治の鼻を折ろうとして、逆に折られた、的な話題になっていた。

若い先生たちの中で水野は煙たがられていたのであろう。

約2週間後、治の受けた高校3年生の第1回模擬試験の結果が出た、
全国平均37点この高校の最高成績は82点であった。

水野は伊藤治と言う生徒に自分のプライドを傷つけられたような気がした。

矜持（初めての定期テスト）

高校に入り約2か月が過ぎた、5月の下旬「中間テスト」があった。

下宿ではヒロちゃんが範囲発表があった日から猛勉強に入った。

治はいつも横で寝ているか、タバコを吸っているだけ。

たまにヒロちゃんから質問される事が有る。

「15は勉強せんでん、分かるけん良かったいね」と勉強に疲れたヒロちゃんが言う、治は苦笑いするだけである。

ヒロちゃんにとっては、徹夜の日が続く、そして無事、初めての中間テストは終わった。

その数日後から各授業はテストの返却が始まる。

治の成績、理科（生物）100点、社会（日本史）95点（漢字間違いでマイナス5点）、現代国語90点（漢字間違いでマイナス10点）古文100点、

「英語32点」「数学0点」であった。

理科、社会、現代国語、古文だけの合計点では学年1位だった。

英語の返却の時間に担当教諭の吉野が「伊藤」と名前を呼び答案用紙を返す時に、

「何だこの32点と言う点数は」とクラス中に聞こえる声で言った。

それを聞いた治は、受け取った答案用紙をその場で破り捨てた。それを見た、吉野は顔面をピクピクさせながら、怒鳴るが治は黙って自分の机に向かう。

「伊藤」と怒鳴り吉野は追いかけて治の首筋を掴んだ、

治はその手を払いのけて、「なんね」と妖艶とした目で振り返ると、吉野は「何だその態度は、先生に対する態度か」と真っ赤な顔をして怒鳴っている。

治は「先生ちゃ、誰んの事ね」とからかうように言った。

吉野は今にも殴りかかりそうになるのを抑えた、何故なら。

吉野は、4月の最初の授業の時の治の言葉を思い出した、

「がこの先生ちゃそがん偉かとね？」という言葉である。

吉野は目の前にいる伊藤治と言う少年がとても危険な存在に思えてきた。

今ここで手を出したら、この伊藤と言う生徒は多分とことん、自分を追い詰めるに違いない、と感じたからだ。

吉野は平静さを装い「どうして、答案用紙を破るんだ」とだけ聞いた、伊藤は瞬間に妖艶な顔に戻り、

「お前が、人の点数ば発表するのとおなじたい」と答えた、さらに伊藤は

「どがんで、おつが点数だけ発表せんばね」と聞いてきた。

吉野はその言葉を聞いて内心「お前」と言われたことに対する怒りよりも、「しまった」と感じる方が強かった。

昨夜自宅でテストの解答をしていて、

伊藤の32点と言う点数を見た時に、思わず笑った。あの生意気な「特別な生徒」に恥をかかす事が出来ると思ったからだ。

ところが、目の前にいる伊藤治と言う生徒は、自分の思いとは違った、想像もしなかった態度を取って来たのだ。

まさか、自分の目の前で答案用紙を破り捨てるなんてことをするのは全く思ってもいなかった。

過去に答案用紙を破り捨てた生徒は数名記憶にある、しかしそれは自分の机に戻ってからのものである。

少なくとも自分の目の前と言う生徒はいなかった。

それでつい、怒りで伊藤の首筋を掴んでしまった、それに対して今度は「先生とは誰の事か」と、からかうような目で言われる。

「もう良い」とだけ言うと教壇に戻った、しかし伊藤は「良うなかばい、答えんね」とまとわり付けてくる。

吉野は何も言わずに、次の生徒の名前を呼んだ、

伊藤治は「途中で逃げるぐらいなら最初から言うな」的な事を言って、破り捨てた答案用紙を教室のごみ箱に投げ込むと、前のドアから出て行ってしまった。

教室が静まり返る、この1年1組全員が自分を軽蔑しているように感じた。

吉野は明らかに自分の失態であった事に気が付いた。

治は廊下に出ると、クラスの前壁に背中を付けて座り込んだ、まるで悪い事をした生徒が廊下に座らされてるようにも見えた。

治は心の中で、

何故に自分のしたことに怒らないのか、吉野の気持ちが見えない。自分の言っていることが正しいのか、吉野の言っていることが正しいのかさえも分からなくなっていた。

廊下に座り込み知らぬ間に寝ていたみたいで、休み時間に入ってジイに起こされた。

「0点」だった数学の時間が来た。担当の水野は治の答案用紙は治の前の生徒に渡したただけだった。

その生徒は不思議そうな顔をして「0点」と書かれた答案用紙を治に渡す。

全員に答案用紙を配り終えた時に

伊藤が突然「先生、この前のテスト何点やったと」と聞いてきた、水野ははつきりと狼狽している自分を感じた。

黙っていると、伊藤は「このテストとどっちが難しかとね」とさらに聞いてくる。

水野は何も答えずに、授業を進めた。

水野も前夜に自宅で中間テストの採点をした、その時に伊藤はたぶん満点だろうと確信していた、

しかし予想に反して伊藤の答案用紙は白紙だった、白紙の答案用紙を見た時に水野は自分の犯した愚かな行動を悔いた。

治はそれっきり窓の外を見ていた。

その日の午後の職員室での「学年担当会議」の席では、伊藤治の処遇が話題に上がっていた。

議題として言いだしたのは英語担当の吉野先生である。

「伊藤と言う生徒は、かなり問題があります。このまま放置すると授業の妨げになると思っていますが」と言う旨の提案をした。

最初に発言したのは数学担当の水野先生だった。

吉野はこの提案に水野先生は賛同してくれると思っていたが違った。

水野先生は立ち上がり。

「どんな状況だったのか詳しく聞かせてもらえませんか」と質問してきた。

吉野はテストの点数を大声で発表したことを黙って後の部分だけを報告した。

てっきり、自分の応援をしてくれると思った水野先生は

「吉野先生本当にそれだけですか」と聞いてくる、さらに水野は5月の初めの自分の犯した伊藤治に対する愚かな行動を話し出す、

勿論他の先生達は、大まかな話は噂で知っていたがまさかこの会議の席で水野先生本人の口からその話が出るとは思っても見なかった。

今回の中間テストが白紙だった事。

自分が伊藤の平素の態度を諷め様として、3年生の模擬試験を受け

させた事。

そのテストが満点だった事、実際に受けた3年生の最高点が学年トップの野口と言う生徒で82点だった事。

そのテストを受けさせた意味も結果も伊藤に知らせなかった事。

春休みの宿題未提出に対して、大目に見たら、逆に伊藤治に「それで良いのですか」と言われて叱責した事。を発表して。

さらにこう付け加えた。

「伊藤治と言う生徒は確かに問題はあると思います、しかし私の問題だけに関して言うと全ての原因は私の軽率な思考、行動にあります。」

「あの伊藤と言う生徒は決して自分から問題を起こしているのではなくて、こちらの取った行動に対して反応しているという気がしてなりません。」

「しかし、そうであっても伊藤が問題有るのは事実だと思えますがね」と最後は今日の会議参加者の中で最年長らしい言葉で結んで、大仰に腕を組んで座った。

それを聞いていた1年1組担任の新井先生が、

「吉野先生の件は良く分かりませんが、水野先生の問題は明らかに水野先生が悪いんじゃないでしょうか」

「何故、明確に話してあげなかったのですか」

「3年生の模擬テストを受けさせるのも、『君の実力が知りたいから』と言えば問題ないと思われるし、

結果にしても『満点だったぞ良くやったな』と褒めてもよかったのではないですか」

「それなのに何故に、その様な事が言えなかったのか、の方が問題ではないでしょうか」

「白紙のテストは伊藤の模擬テストに対するデモンストレーションだと私は思っています」

すると他の先生から「では、吉野先生の問題はどんなんでしょうか」との声が出る。

新井先生は言葉に詰まってしまい「それは良く分かりません」とだけ言った。

また他の先生は「水野先生の問題は新井先生の言う事にも一理有りますが、吉野先生の問題は違うと思いますが」と言う。

その時、吉野は「点数を大声で言った」事を隠して伝えた事をかなり後悔して、付け加えようとしたが、言うタイミングを逃してしまっていた。

会議の話題は「答案用紙を教師の目の前で破り捨てた、態度に対する処罰」になっていた。

「停学処分」と言う声や「反省文提出」「保護者召喚」「校内謹慎」等が話し合われている。

吉野は顔面が引きつり、自分が脂汗をかいているのではないのかと思うほど、狼狽しているのが分かった。

意を決して吉野は立ち上がり

「実は」と口を開いた。参加者全員が発言を止めて突然立ち上がった吉野先生を見る。

吉野は「状況を詳しく報告します」と言って今日あった事を詳しく報告した。

それと、最初の授業の春休みの課題未提出の時の事もありのままに報告した。

その途端に新井先生が「なんでそんなことをするんですか」と怒気を含んだ目で吉野先生に聞く。

吉野は何も言えなかった。

新井先生は「伊藤治は皆さんご存知でしょうが私の遠縁の方の子供です、勿論私も彼が子供の頃から知っています、彼はごくごくありふれた田舎の少年です。今お二人の先生方の話を伺うと私の目にはお二人が彼を虐めてる様にしか感じませんが、彼が何かしたのでしようか」と問い詰める。

すると吉野先生が「現実問題として、入試で白紙の答案用紙を提出した生徒が合格することが間違っていると思うのですが」と言う。

それに対してはこの会議に参加していた水野先生より若い江頭教頭が口を開いた。

「その事については、決着のついている事です。今ここで論ずるべき問題ではありません、論ずるなら文書で提出して下さい、私の方からも吉野先生からその様な発言があった事は校長先生に伝えておきます」と言った。

吉野はいよいよ追い詰められていく自分に気が付き何も言えなくなつた。

会議はその後、両先生の取った行動の理由が論点となっていた。

それに対してはまず水野先生が話し出した、要約すると

「今まで教えた教え子の中で天才と言われた生徒でも私に敬意を表したのに伊藤はそれをしない、それに対する指導者としての責任感から、起こしてしまった」と言う事らしい。

しかし、それは水野先生の教員として間違った「矜持」が問題であることは会議に参加している全員が感じていた。

勿論、水野自身も感じてはいたが、たかだか15〜6歳の田舎の「ガキ」にそれは決して認めたくなかった。

その思いは今後伊藤治を無視すると言う最悪の形で決着がついてしまふ。

吉野先生も水野先生と殆ど似たような「物」である事も全員が分かっていた。

そしてまた、吉野も治を無視すると言う決着方法を取ってしまう事になる。

会議が終わり、職員室の自分の机に戻った担任の新井は治が不憫で

ならなかったが、
入学後すぐに尋ねた治の家での治の物静かな顔を思い出して、

今の自分には何も出来ないと思い込んでしまった。

新井もまた、治の本心が見えなかったたのである。

京子（1）

「学年担当会議」の結論は結局具体的な決着のないままに終了した。

その頃の治は中間テストの前から気になっていいる事が有った。

「京子」の事である。

憧れの先輩から紹介された京子の事が頭から離れない、

テスト期間、一生懸命ヒロちゃんが横で勉強していても、自分は手に付かない。

出会った次の日から昼休みになるとジイを連れて毎日の様に購買部に行くが結局会えない。

購買部をウロウロしている姿が先輩たちの目に留まって、その後のランチ事件に発展した可能性もあるかもと治は内心想っていたのでその事件が有ってからは購買部には行かなかった、勿論その後、京子とは会えずにいた。

テストも終わってしばらくしたある日の夜の事。

下宿に帰り、晩御飯食べて夜の8時過ぎにヒロちゃんと二人でタバコを買いに近所の雑貨屋さんに行った。

タバコのある雑貨屋さんには下宿と高校の中間にある、まだちらほらと制服姿の学生も歩いている、

この高校には学校の敷地内ではなかったが校門の前の道路を挟んだ所に学生寮が有った。

勿論下宿と違って寮の規則は厳しい、夜8時過ぎまでは寮からの外出は運動服もしくは学生服でなければいけない。だから、早い時間は寮生と普通の学生の区別はつかない。

だが夜8時を過ぎると私服での外出が許される、ただし指定されたお店への買い物だけである。

治たちが良く行く雑貨屋もその指定されたお店に入っているらしく夜8時過ぎると寮生らしきお客さんで賑わう。

その日も数名の寮生らしき人がいた、私服の人もいれば、体操服姿の人もいた。

2人はいつものように夜食と「下宿のおばちゃんに頼まれた」タバコを買って雑貨屋を出て下宿の方に歩き出した時に、後ろから「治」と呼ぶ声が出て振り返ると私服姿の京子が笑顔で立っていた。

「京子先輩、何ばしよつと」と聞くと、

「あら、知らんやつたと、私寮に入ってるんよ」と答える。

「知らんやつたばい」と言いながら、私服姿の京子を見ていた。

ジパンに白いシャツ姿がとても眩しく見えた。

京子は「何ば買ったと」と言いながら手にしている茶色の紙袋を覗く素振りをする、

治は慌てて「夜食ばい」と中身など見えるはずもない紙袋を後ろ手に回す。

京子は「あつ、さてはイケない物んが入っちゃよろ」といたずらっぽく言って顔を治に近づけてきた。

治は恥ずかしくなつて「何も入つちよらんばい」と少し顔をそむけた、

すると京子が真顔になつて、「叩かれたところはもう良かとね」と心配そうに言う、

2年生の京子は治が「暴行」されたことは当然知っている。

「もう何ともなかばい」と答えると、

治の耳元に顔を寄せて来て「2年生の中では治はカツコ良かつて、噂の的ばい」と小声で言い店の中に入つて行つた。

治とヒロちゃんも下宿に向かつて歩き出した。

2人並んで歩いていると、ヒロちゃんが「15あの人誰つね」と聞く
「裕子先輩（憧れの先輩）の友達たい」と治がい言つと。

「あの先輩や、15ばしいちよっぱい」とヒロちゃんは、京子が治の事を好きだと断言した。

治は内心嬉しかった。

2年生の谷畑京子は島の中では一番大きな中学校の出身だった、父親は公務員、母親は田舎では珍しい専業主婦の家庭の長女として育つた。

父親は頑固で厳しかった、しかし父親が頑固なのも厳しいのも

この地方ではそれほど珍しい事ではなかった

しかし、その頑固さと厳しさは他とは少し違っていた。

父親は事ある毎に「世間体」を気にする人であったのだ、だから京子は中学までは自分の意思を言えない、やりたい事も出来ないと言っ

この地方では珍しい世間体を気にする少女だった

京子はいつの頃からか父親がとても嫌いになっていた。

高校になると同時に、決して通学できない距離ではなかったがクラブ活動を理由に入寮の許しを父親にもらった。

そのクラブ活動は実際には入部すらしてない。

京子はただ、自宅を出て自由になりたかったのである。

中学時代の学業は中の上程度だが、生徒会や陸上部で活躍したり、弁論大会でも県大会に進んだりと優等生だったし、身長はそれほど高くはないが、目が大きくて愛くるしい顔をしていたので、学校でも近所でも評判の良い、少女で通っていた。

寮生は土曜日になるとクラブ活動や補習授業などを受けない生徒の殆どが、外泊許可を取って自宅に帰る。

しかし、京子はクラブも補習も無いのにあまり自宅には帰らなかった。

土曜の夜の学生寮は平日とは全く違う「自由な空気」がある、平日なら「食事時間」「入浴時間」「自習時間」「部屋からの外出

禁止時間」「消灯時間」等の細かい規則があるが、休みの前の日に
なると殆どが無くなって、寮生は思い思いに夜を楽しむ。

高校生の女子生徒が集まって話す話題と言えば、当然異性の事。

「あの子がカッコ良い」とか「あの先生が好き」だとか「あの子と
あの子が付き合っている」とかである。

勿論中学生の頃にロストバージンしていると言う「つわもの」もい
たりするから、夜の話は盛り上がる。

「ねえーねえー初めての時ってどんな感じなの」と一人の生徒が聞
く、

すると「ロストバージンを済ませた『先輩』」が色々と教えてくれ
ると言った感じで一晩中黄色い悲鳴を上げながら朝まで話明かす、

それは京子に限らず、年ごろの女子高生にとっては楽しい高校生活
であつたらう。

高校に入り約一月後にやって来た5月の連休、殆どの寮生は実家に
帰った、

京子は実家には帰りたくなかったので、外泊届けは出さなかった。

結局女子寮に残ったのは1年生は2人と3年生2人の4人だけ。

連休中は寮母さんもお休みで食事もない。

学生寮は男子寮と女子寮が並んで建っていて食堂で繋がっている。

食事の時間は朝は男女同じ時間帯だが、夜は時間が違っていた。

男女とも食堂の出入り口の横に「舎監室」と言つのが有って、日替
わりで舎監となつている高校の先生が男女とも泊まり込みで朝まで
いたので、食堂の出入りは舎監の許可が必要だった。

しかし中には、深夜消灯時間を過ぎてから、こつそりと食堂の隅っこの暗がりには座り込んでひそひそ話をする男女もいたりする。

連休初日、京子たち残った女子寮生は早い時間から食堂の調理場に入り晩御飯の支度をしていた。

メニューは「家政科」の3年生の先輩が提案した、和食中心のメニューである京子は料理はあまりした事ないので、先輩の手伝いをするだけ。

先輩の指示の下、料理が出来上がった、いつもなら部屋での食事は許されないが、

連休中は男子生徒も自分らで作るので、舎監の先生とすればなるべく男女を隔離したい為に連休中は女子は部屋での食事となる。

何時もより豪華な食事を一つの部屋に運んで皆で食べる。勿論たわいもない話をしながら食べる、食事が終わったのは夜の9時頃。

後片付けは京子達1年生の仕事で、二人で使い終わった食器を持って食堂の調理場に行き洗い物をしていたら、

3年生の男子生徒3人が食事をしに入ってきた、全員サッカー部の先輩たちだ、3人は手にインスタントラーメンの袋を持っている、男子生徒の一人が「あつ、よかねえ女子はご馳走んごちゃって」と洗い物をしている京子たちに向かって冗談を言ってくる。

京子は黙っていたが友達が「そうばい、美味しかったですよ」とそれに答える、

「男はラーメンばい」と大袈裟に肩をすくめて、洗い物をしている横でラーメンを作り出した。

京子は3人の中の広瀬先輩が実は好きだったので、恥ずかしくて黙って洗い物をしていた。

普通の日ならまずありえない、男子と女子の距離、年ごろの男と女。知らず知らずのうちに話は弾む、途中で女子寮の舎監の女先生が顔を出す、
舎監担当の女先生は、年頃の子供たちの気持ちは良く分かるから大目に見たのか、
「あまり遅い時間まで話していたら駄目だよ」とだけ言うと舎監室に戻ってしまう。

いろいろ話しているうちに、友達が京子に

「京子、明日は私たちが先輩3人分の食事作ってあげようか」と言
いだした。

男子生徒は3人とも大喜びしている、
結局明日は京子と友達二人で先輩男子生徒の晩御飯を作る事になっ
た。

次の日の朝、2人はメニューを考える。2人の女子先輩にも前日の
夜に食堂であった事と今日の事は伝えてあったので、
家政科の先輩にもメニューの相談をしたりして、2人が出来そうな
「かつ丼」にした。

2人は昼間バスに乗りバス停5つ先にあるスーパーに材料を買いに
行った、かつ丼9人分である。
必要な食材と量は家政科の先輩に聞いてメモしてあったし、作り方
もしっかり教えてもらった。

お金は京子が出した。勿論後で全員から貰う。

夕方5時ぐらいから、調理室に行つて二人で作り出す。先輩のメモを見て作るが二人ともまだ1年生。

うまく作れない、2人で失敗しては笑いながら楽しく作った、見た目の「無骨なカツ丼」が出来上がったのは7時ごろ。

家政科の先輩が男女の舎監の先生にそれぞれ出来上がったかつ丼を差し入れて、特別に食堂での男子生徒と女子生徒の使用許可を取つてくれた。

先輩男子生徒3人を男子の舎監の先生に呼んでもらつて、7人が一つのテーブルに座つて

京子の好きな広瀬先輩が、代表して「今日はこのような盛大な食事会にお招きありがとうございます」

とふざけて挨拶して皆の笑いを誘つてから、皆で見た目の「無骨なかつ丼」を食べた。

食事が終わつてから、男子生徒からお礼に我々が一曲歌います。と言って持つて来ていたギターを持つて歌いだした。

夜の食堂にギターの音とそれに合わせて歌う声が響いていた。

京子の好きな広瀬先輩が一番最後に偶然にも京子が大好きな歌を自分でギターを弾きながら歌つた。

京子は黙つて先輩を見ていた、それは男女7人にとつても、楽しい時間であつた。

京子はますます広瀬先輩が好きになつてしまった。

その日の夜は京子と友達は二人で京子の部屋で寝た、寮の部屋は4人部屋で、部屋に入ると通路を挟んで造り付けの2段ベッドがある、それぞれのベッドには思い思いのカーテンが付いてる、ベッドは普通の布団が丁度入るぐらいの広さで壁や天井には時間割や年表、数学の公式、歌手のポスター、家族の写真等をこれまた思い思いにピ

ンで貼り付けている。

中にはボーイフレンドの写真を留めている生徒もいた。

京子は時間割と苦手な英語のプリントの張られた自分のベッドに入り、友達は通路を挟んだ横の帰省している1年生のベッドに寝転んだ。

寝転んですぐに友達が「京子あんた、広瀬先輩の事好きやろう」と聞いてきた。

京子はびっくりして「なんで」と聞き返したら、友達は見てたらわかると言った、黙っている。

「告白すれば」と言うので、京子が「えっ」と言うと友達は起き上がってベッドの淵に腰かけ、

「私が言っただけよ」と言いだす。

「フラれたら恥ずかしい」と京子は答える、友達は当たって砕けると笑いながら言った。

連休2日目、少女二人の夜は恋の話で更けて行った。

翌日の昼過ぎ京子は自分の部屋で勉強していたら

友達がセーラー服姿で入って来て「京子、良い話聞きたい」と嬉しそうに言う。

「何」と聞くと。

京子の顔を嬉しそうに覗きながら「広瀬先輩彼女いないんだって」と言う、

「それ、誰に聞いたの」と嬉しさを我慢して聞くと、サッカー部の1年生から聞いてきたと言う。

「京子今晚告白しなよ」と言うので、京子は思い切って告白してみようと思った。

その日の夜に食堂で京子は生まれて初めて異性に好きだと告白した。

結果は、京子にとってはとても嬉しい結果であった。

高校一年生の5月の連休三日の夜に京子は広瀬先輩と付き合い合う事になった。

喪失（京子）

治たちの高校は三方を山、正面が海で囲まれていた、言わば入り江の奥に位置している。

校舎の裏山は険しくて、ワンダーフォーゲル部の格好の活動の場になっていた。

海に向かって左側には、少し平野部が有ってそこには田畑が一面に広がっているその田畑の向こうには、なだらかな山が続いている。

右側にはバス道路が有って学生寮が有るその裏手にもなだらかな山々が有る、その裏山には綺麗な山道がどこへともなく続いていた。

その山道を近所の子供たちが夏は虫かごに網を持ってセミを取りに行く姿が見える、秋には多分栗拾いに行くんであろうか、数人の子供が元気に山道を駆け上がって行く。

正面の海沿いには治の村よりはるかに多くの家が建っていた。

連休4日目、昨晚の告白の次の日の昼、京子と広瀬は裏山に二人で出掛けて行った。

寮の正面で待ち合わせて二人で裏山のなだらかな山道を歩く。

五月の海からの風が京子は心地よく感じながら前を歩く広瀬の姿を見ていた。

「この人が私の彼なんだわ」と心の中で思う。

そうすると嬉しくなっついつい顔が火照るのが分かった。

裏山の中腹まで来ると高校とその周りを見渡す事が出来た、のどかだが綺麗な風景であった。

二人で二時間ほど山歩きをして寮に戻った、男子生徒の入り口で広

瀬が

「今晚11時頃に食堂でこっそり逢おう」と京子に耳打ちした、京子は黙って頷く。

夜になり、京子は黄色いトレーナーにジーパン姿で自分の部屋をこっそり出て暗い廊下を静かに歩く、食堂の近くまで来ていったん立ち止まり、舎監室の方をこっそり伺う、ドアの窓から明かりが漏れていた。

足音を忍ばせてドアの前を通り抜けて、真っ暗な食堂に入り注意深く暗闇に目をやるが全く何も見えない。

その直後背後から小声で「京子ちゃん」と言つと同時に肩を何者かの手で触られた。

京子は小さい声で驚いて思わず自分の口を手で塞いだ。広瀬先輩だった。

二人して暗闇の中を食堂の隅の方に移動する、京子は何も見えないから自然と広瀬の腕にしがみつく、

腕にしがみついたまま、隅に腰かけて小声で広瀬が「舎監の先生に見つからなかった」と言うので、京子は「たぶん大丈夫」と答えてクスツと笑う。

しがみついた腕から広瀬の胸の厚みを京子は感じていた。

しばらく小声でクラブの事や将来の事などを広瀬が喋る、京子は何も言わずに黙ってそれを聞いている、

5月の夜の暗い食堂、まだ少し肌寒い、広瀬はしがみついた腕をそっと振りほごき、京子の肩を抱き寄せ「寒いね」と言う。

京子はなすがままに広瀬の厚い胸に顔をうずめる格好になって、小さく頷く。

すると、広瀬の顔が近づくと気配が感じられた、ビククリする間もな

く広瀬の唇が京子の唇に重なる、緊張で京子は全身に力が入る、広瀬はゆっくり離れると肩に置いた腕に力を入れ京子を抱き寄せた、

初めてのキスだった。

少女漫画の世界に書いてあるようなレモン味ではなかったが、冷たい広瀬の唇の感触が残っている。

その後二人とも小さく震えだすほどに寒くなってきた。

広瀬が「部屋に来る」と聞くので「ダメじゃないの」と京子は答える。「今日は誰もいないから、大丈夫だよ。行こう」と立ち上がり京子の腕を引っ張る。

黙って立ち上がり二人はこっそりと男子寮の舎監室の前を抜けて広瀬の部屋に向かう、時間は0時30分。舎監室は真っ暗だった。

女子寮も男子寮も基本的な造りは同じだが、男子寮には無造作に洗濯物が干してあったりして女子寮とは違う感覚を京子は感じる、部屋に入る、共同ではあるが京子にとっては初めての家族以外の異性の部屋、男の匂いがする。

明かりを点けると乱雑に積まれた本や、運動用具などがある、しかし寮則の厳しさのお蔭で散らかっている感じではない。

広瀬の机の上には参考書が開いてあり本棚には3年生らしく大学受験関係の本が並んである。

広瀬は自分の椅子に腰かけて京子は違う椅子に腰かけた。

明るい部屋で広瀬を見るとさっきのキスを思い出して京子は少し恥ずかしくなって微かにうつむく。

その時廊下で小さな音がする、二人ともびっくりして顔を見合す、こんな所を舎監の先生に見つかつたら二人とも停学処分どころか退学処分であるから、緊張が走つた。広瀬がゆっくりとドアを開けて顔を出して廊下を見渡すが特別に異常はない。

寮の各部屋は内鍵はついていない、だから外部からの侵入者を拒むことは出来ない。

今この男子寮には一階の広瀬と、二階に別のサッカー部の生徒がいるだけで後の部屋は真っ暗だった。

広瀬はドアを閉めると、入り口の電気を消して、

「この方が安心だから」と言う確かに京子もその方が良いと感じた。

机の上の小さい明りだけが付いてる部屋でまた二人は話し出す、でも寒い。

広瀬が「寒いから布団に足入れて話そうか」と提案する。京子もそれに賛成した。

狭いベッドの中に二人で入り壁を背にして並んで座り足だけ布団に入れる、電気は消して万が一の舎監の先生の見回りに備えた。

廊下の音を気にしながら、ひそひそ話で話す。

京子にはまるで夢の時間であった。

話しているために、足と足がぶつかる二人ともジーパンだったがその度に京子はドッキリしてしまう。

その時また廊下から足音がした、今度ははつきりと人の足音だった。広瀬は京子を抱くようにして布団を被り二人は息を殺す、その足音は部屋の方に近づいてきて、部屋の前を通り過ぎると部屋の横のトイレに入ってしまった。2階の帰省していないもう一人のサッカー部の3年生だったみたいだ。

足音がトイレから出て遠のいても、

二人は布団を被ってまだ息を殺している、広瀬の腕の中で京子も息を殺していた、

そのまま、どちらからともなく抱き合い自然にキスをしていた。

京子はぎこちない自分がかかなり恥ずかしかつたが、広瀬のされるままに身体を任せていた、

その夜京子は、「女」になった、高校一年生の5月の事であった。

その後約10か月間京子は週末の深夜になると広瀬の部屋を訊ねるのが楽しみであった。

その広瀬もこの3月で卒業した。

福岡の大学に行くために広瀬が島から出て行った日に、京子は一晩中泣いた。

暗闇の橋

中間テストが終わって一週間後に総合結果が発表された。上位50名までが各学年の廊下と職員室横の購買部前に張り出される。

治の得点は、理科100点、日本史95点、現代国語90点、古文100点、英語32点
数学、「200点」であった。

数学の水野が治の実力を認めて白紙のテストを「満点」と評価したのだ。

結果、700点満点のテストで合計点は、617点であった。

学年総合順位は2位とは2点差で治が1位となっていた。

張り出された総合結果を大勢の生徒が立ち止って見るが、治は全く興味が無かった。

朝治が教室に入ると、1組のクラス委員長のひろ子が治の席までやって来て「15、1番よ」と嬉しそうな顔をして教えてくれた。

治は気のない顔でひろ子を見て「そう」とだけ言う。

その日の1時間目は数学の授業だった、白髪頭の水野先生が入って来て、いつものようにひろ子の号令で全員が起立して礼が始まる。

「先日の中間テストの件でみんなに話があります、伊藤治は今回の中間テストは白紙提出したのですが、テストの数日前に特別に受けた3年生の模擬テストで満点を取っていたので、今回は特例として満点としました。3年生の模擬テストの内容は当然今回の中間テストの比ではなく、実際に受験した3年生のトップの得点が82点と言う大変難しいテストでしたので、そのテストに満点を取った伊藤は他の先生方とも相談の上満点としました」

と発表した。

教室のほかの生徒がざわつく中で当事者である治はいつものようにぼんやり外を見ている。

その治に向かって水野が「伊藤、今後もしっかり頑張れよ期待してるから」と声をかけた。

その声に対して外を見ていた治が

微かに、眉間にしわを寄せたのは誰も気が付かない。

なおも水野は「伊藤は中学時代の県下一斉模擬テストの数学でも全満点と言う結果を出して高校にきています、それに加えて今回特別に受験した3年生の模擬テストでも満点と言う素晴らしい、」

突然「バーン」と大きな音がして全員が音の方向を見る、治が両手で机を叩いたのだった。

クラスの生徒は全員驚いて黙って見ている、水野でさえも目を見開いて治を見ている。

すると治は立ち上がって後ろのドアから出て行ってしまった。

あまりの突然の出来事に水野自身も唾然とする、瞬間我に返ると教室を飛び出して階段の方に向かって歩いていく伊藤を呼び止めるが、伊藤は振り向きもせず廊下の角を曲がって視界から消えた。

水野は誰もいない廊下を呆然と眺めているしかなかった。

その日の授業は急遽「中間テストの見直しテスト」と言う事で教科書の問題を全員に時間いっぱい制限時間を与えて行かせ

水野は教室の隅に椅子を持って行って座り、考え込んでしまう。

ここ数日水野は、こう考えていた。

伊藤治と言う「ガキ」の数学的能力はおそらく本物、自分が見てきた数多くの生徒の中でも多分群を抜いてるだろう、いや比べるべき次元が自分も含めて違うかもしれない。

しかし自分は教師だ自分の指導無しにはどんな能力も「花」開かずに終わるはずだ、自分の助けなしにはこれ以上にはならない筈だ。

そう考えて今日の授業の冒頭の発表をした、あれは自分なりに「伊藤に目をかけて上げているぞ」と表現したつもりでもあった。

それが当の「ガキ」の態度は机を叩いて教室を出て行った。

「ふざけやがって、自分を何様だと思っている」

水野は次第に治に対して憎しみすら感じていた。

中間テスト総合24位のクラス委員長ひろ子は「急遽」おこなわれた見直しテストをやりながら、治の事を考えていた

初めて会った時の治は、くたびれた制服に使い古された鞆と言う姿で教室に入って来てキョロキョロしていた。

元来おせっかい焼きのひろ子はそのクラスメイトであろう「少年」が座る席が分からずに困っているだろうと思いをかけた。

その時に初めて噂には聞いた事が有った「伊藤治」を知った。無口で無表情の治に惹かれて行く自分を感じている。

その後の治は事ある毎に先生達と衝突する、ひろ子は傍でいつもハラハラしながら見ていた。

英語の吉野先生はあのテスト返却事件の後から治には絶対に声を掛けない、まるで教室にいないかのような態度で接している、吉野先生の問題はクラスの生徒の間では「吉野先生が悪い」と言う意見が大勢を占めていたが生徒の思惑ではどうしようもない。

しかし数学の水野先生との確執の理由が良く分からなかった、治が何故あんな態度を取るのかが理解できなかった。

今日でも水野先生は伊藤を褒めて「頑張れ」「期待してる」「そう言ってくれてるのに、治は何故だか怒って教室を飛び出して行く。あんな風に言われたら「私なら嬉しいのになあ」とひろ子は思っていた。

クラスの皆もひろ子と同じ感覚だったと思う、吉野の問題は別にして水野の問題が皆には理解できてなかった。

勿論 水野にもそれは理解できていなかったのかも知れない。

教室を飛び出した治は靴に履き替えもせず裏山に向かっていて、特別に何を考える事も無くただ漠然とした気持ちで人気のない所に向かっていたのである。

裏山は校舎の外堀の向こうはすぐに険しい山となっている、急な山道を前かがみになりながら登ると少し広い所に出た、そこに座ると校舎の遙か向こうに海が見えた。

治はその場所に寝転ぶとぼんやり空を見て考え出した、水野の考えが全く理解できなかったからだ。

高校受験をするときに、父親から言われた「お金借りてまで高校行くな」と言う言葉と、

その後、高校行かないと行った時の「うるさい、黙って高校に行け」と言う言葉の意味。

春休みの課題未提出で吉野に怒られた事、治にも怒られる理由はわかる、でも治にしてみれば分かっている範囲の課題には意味を感じなかった。

しかし、あの時の吉野は一方的に辞書で殴りつけてきた、それが治には理解できなかった。

未提出で殴ったのか、わかると「驕った」自分を諫めたのかである、諫めたのなら治にとってはありがたい事であることぐらいの分別はついている

でも吉野は確かに「宿題をしてこないからだ」と言って2度も殴りつけた、自分が質問した「宿題の意味」に対しては答える事無くである。

喧嘩にしても戦争にしても野生動物の争いにしても必ず正当な理由が有るそれは仕掛けた側の勝手な言い分であっても、仕掛けられた側もある程度は理解できるものである。

事実2年生に呼び出されて袋叩きに遭った時もその理由は治自身は納得しないしろ、分かっている。

失敗に終わったが仕返しに行った事に対して、仕返しを受ける側も何故にあんな目に遭ったのかの理由は分かっている筈だ。

だが、今日の水野にしても沢山の言葉は喋るがその言葉が自分の心に届いて来ない、

届かないのにいつまでも「他人」の事を喋り続けている水野に腹立たしく思った。

袋叩きの時の「お前」と言う罵りの言葉の方がはるかに、心には届いていた。

治は自分の周りの大人達の存在価値が分からなくなっていく、高校進学の時もそうである。

誰も自分の進むべき方向の先に立って明かりで照らしてくれ手招きする人はいない。

殆どの大人達は、自分が疑問に感じて少し考えると一方的に怒る。

高校入学後の現在もそうである、自分がどう進みたいのかなどは一切お構いなしに、前から手を振るのではなく。

自分が少しでも横にそれたら、怒鳴ったり殴ったりである。

前に向かって引つ張ってくれるでもなく、ただ横にそれたら、理由も知らせる事無く叱る。

まるで

暗闇の中の橋の上を歩いているようなものだと言は感じていた。

前は暗闇、横にそれると意味も無く壁がありその方向には行くことも出来ない、かと言って前に行くのは不安で仕方ない。

どうせ見えない暗闇なら、せめて自由に歩きたい、治はそう思っていた。

横の「手すり」が邪魔に感じて仕方なかった。

第1部。終了のお知らせ

いつも

「君 真夜中の橋を渡れ」をお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。

手探りで始めた自身初めての創作でしたが、文章表現も文章力も全く稚拙な事を痛感させられました。

そんな中でも、大勢の人に読んで頂きただひたすら感謝です。

今回勝手ではありますが、ここで一旦打ち切りとさせていただきます。

今後は

「君 真夜中の橋を渡れ」第2部 として新たに書いて行くこと
思っています。

毎回読んで頂いている方はお気づきだったと思いますが。

各章のサブタイトルは二文字で書いておりますが、
最後は

「暗闇の橋」と言うサブタイトルになっておりました。

この話で一つの区切りと最初から考えてましたので。

第2部に移行させていただきます。

今後とも皆様に喜んで読んで頂けるよう誠意書きますのでよろしく
お願いいたします。

2011・10・04 15 (jyugoo)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6996v/>

君、真夜中の橋を渡れ。（第1部）

2011年10月28日10時53分発行